27-59

T-4T

18

No.306/XXV.

東京高等裁判所

判決

右の明治四十三年第一号決定に対する同盟国人隠匿財産の管理人の抗告に対する

同年五月一日東京高等裁判所

27
59

いちご姫

美妙齋主人著

第一

「まのあたりに世の中が回り持であるものならば頼朝このかたの片手落ちは何の譯。または「ゆ持ちと言ッてあきらめるその下から直にその回り持ちさへわからぬまでに思はれるほどの世の情無さ！　禁裡――たゞ名のみの禁裡！

大内と際あ公めてあッた昔は今その面影を古老の涙ながらのくり言に殘すばかり、「いたはしい、この子も昔を知らいで喃」を子供さへ耳に聞き飽きました。右近、左近、兵衛、右馬、左馬、ゐれらは昔し禁裡の官名。が、今は人の勝手次第つけたい放題。義朝は左馬をいたゞいて雀躍したさうな――それで今は「禁裡からもらはいでも已が自恣ぢや」とは――あゝその口を劈いてもやりたい。此頃までは地下、地下どころか、蛆むし、苔生草。虫か草か、生きて居るか、死んで居るか、それすらも知れなかッた青侍や物商人、それが俄に名乘まで付けての改名。

立賣りの近くを通ッても公卿とさへ見れば――たとひ若徒が主君の代理で一日の衣冠に猿の面して居ても――商人が見世棚を片付けたり、證したりしたものを、今は見もかへらぬ始末。それを叱られぬ始末。叱るだけの力を持たぬ始末。その力叱るはおろか生殺與奪、賞罰黜陟までも――誰が取ッたか。おのれ、その足……輕同樣で舊はあッた……利のやから。そは言ふものゝ、やッぱり頼朝。

見わたせば百年のむかしの儘な東山、百年の前には被衣着ての寢すがたと短冊にさへ書れたものが、百年の後には小具足つけての伏勢かと鎧摺の雜兵に言はれるとは！　山はむかしの儘で皇居を守ッても守られる皇居には仕立おろしの直垂の影もなし、圓顏で髯の剃跡が疎で濃い、あの憎體な入道の宗全、痩形で、目の細い、好々とした、意地のわるさうな勝元、それら二人がやうやく死んだばかりで戰爭は無くなッたものゝ、いまだに軍勢殘らずは引き返らず、永陣のうさはらしか、人も家も財も手あたり次第掠め取ッての仕たい三昧、世が世ならばおのれらに何で〻〻とは蔭辨慶、表向は崇め奉ッて切めてろの御機嫌のいゝ時に禁裡の破損でもつくろはせやうとまでに――ゝこれで泣かずに居られうかと紫もかけられぬ後室の述懷も又かと珍らしくなくなりました。

應仁てのかた都は全く野原となりました。相國寺あたりを究竟の足だまりとして、追ひつかへしつ命の取り遣りをした波は都全體に、及んだといふだけ野暮、兵火にかゝつて幾千の精神と共に幾萬の家はすべて灰、燒跡をとりかたづけるものも無ければ燒けて大變だと言ふものも無く、大變といふより何より夢か現か、と心も思ひみだれるばかり。戸籍がたしかであッて諸事に屈をしたものならば、時世を苦に病んで發狂した公卿は幾人あッたか、笹の葉に紫の鉢卷とまでは行かずとも三井寺の謠曲を實地に見せる姫も無くは無かッたとか。

まはりを取り卷く山におとらぬと言ッても宜ささうな燒灰の山、その上に直に陣を取るものさへ有るとは。大内のあれはてた有樣は何と言ふたら宜いもの。築垣はくづれたと言ふよりも無くなッたと言ふ方がまだ好ささうな、むしり取れたやうに爲ッて居るところへは又むしられぬために八重むぐらや忍が心のまゝに生ひ茂ッて居ました。

その間には、書くも無殘、菊桐を金で摺ッた記標の瓦が缺けて散ッてゐなしく

子供の手遊物になッて抛げられるばかりでした。何處のか、しかし物は物、義母子をうッた高欄の片はしは半面焦げて草の中に横はり、下司の腰掛になッて居ました。

御處は全く無くならず、殘ッてはゐたものゝ、しかし殘ッたといふだけ、なまじひに昔見せがほの階は白髮の殿上人と諸ともによろぼひ果てゝほとんど障れば碎けさう、御園の草木も大抵は子供に折り取られて、それでも枯れ果てずに夏の新芽を――誰に見せに――射いて居るさへも哀れを呼ぶ種でした。戸や襖の建て付さへ全く狂ッて開閉にてぼ〳〵音のする、もしも滑少納言が居たならば何と之を評したか。音がするのはまだしも、全で動かぬのさへ有れば、風への愛嬌、建て掛けて置くばかりで、煽動を受けては音を立てゝ倒れるのも珍らしくは無いほどでした。「むらしぐれ、音を聞くにも袖はぬれけり」と仰せられたその昔とても是ほどではあるまいと思はれたほど、伺候の女の童や女房たちも儀式だけの姿はして居るものゝ、しかし紅梅の衣も卯花衣のやうな色になッて、そして寢よとの鐘の間際になッても局でかしまい聲をさへ立てぬほどでした。

南のやぶれはてた築垣の邊をしづかに歩く二人の武士が有りました。一目見てそれとわかる主從づれ、主人と見えるのは十八九、年が若いだけに鎧もわかく、威毛は裾濃の藤紫、糸蔦の太刀搦に三尺二寸の業物を反りかへらせて居ました。大した身分でも無ささうで、それで姿り好みは格別なものでした。柄頭は鯨と鮫との取り合はせ、銀と赤銅とで造ッた白鷸鳥の目釘に、それと映らせて、玉藺を浮彫にした鍔、臘色の鞘の艶やかさ。

從者の身姿は事々しく言ふにも及ばず、たゞ主人の顏容、それがもッとも人の目に立ちました。顏容と言ッて外でもなし、力味のある美くしい出來でした。

あるきながら兎角築垣に目をとめる樣子、まだ中門にも近よらぬに、無作法な世のならはしに似ず禮儀の有る事、兜をば脱いで居ました。それくらゐの打扮をするからにはいづれ馬には騎ッて來た譯、御所內をもかまはず乘り打ちをするものゝ多い時世、それで馬は何處に置いたかそれさへも見せぬ樣子。

「たやすくは」、主人が言ひました、「つくろへぬわ、この樣では。ほッ、礎までも……」礎のくづれたところを指さしました。

「中々」、從者が小腰をかゞめました、「周圍のこらず――太い大役でれじやる」。
「大役にしろ、れのが自慾ならば何うとも詮術は有らうずるが辛い世に――覺束ないよ」。
「されば何故でれぢやる？」
「何故てふて、知らぬことぢや、汝なんぞは」。
言ひ切られては主家來、かへす言葉もなし、若武者は次第々に足を移してくはしく壞れた樣子をあらためました。あらためるものゝ從者が不審と思ッたのはその溜息で、一目皇居をながめては溜息、一目築垣を見ては溜息、果はをり〳〵あと聲をさへ拋げました。
不審を凝らした目で從者は主人を見て居たものゝ終には忍びかねて口をも開く
「御所がたの御望みでおぢやるか？」
「左樣ぢや、鹿さへ通ふといふから」。
「見る氣にもいたう毒でおぢやる。東山につくす財は有ッても御垣につくす代は無くて……」

「しッおそれッ！」
何かきびしくさしとめた主人、その顏が直に横の方へと向いた、その方を從者もいぶかしながら屹と見れば、果たして一人の姫君が築垣の横に立ッて居ました。
薄色に宇治の螢を亂れ摺りにした被衣をかぶッて卯花衣を着て居ました。と。只言へば如何にも優美。しかし實を言へばその古びも加減。螢は既に乾物となり、葦の葉には水氣一滴も殘らず、わづかに薄色が生れからの德でさして古びても目に立たぬものゝ、しかし花底の蛇、ねたくも襞のもよりに昨日の色を殘して居ました。無論精好もの、ろれでろの位の物を持つにも似ず卯花衣とは餘りなこと、今はほとんど夏も末、そのくせに衣も更へぬとは！裏の萌黃は黃にかはッて――ろれも駒とめて水かッた山吹の花の露の痕か――乃至は蔀にあくまで怨みを聞かせて餘音を渡殿に漏らしたときの涙の名殘か――兎に角に然るべき方の御愛娘とは知れました。
顏は被衣にかくれてよく見えぬものゝ、わづかに察するとまろでは大凡十六十七歲か、身長は細く伸びた方でいはゆる嬌娜、焚きこめた留奇の香りは無くとも

風に裳をもてあろばせて心ありげに此方を見て居ました。

築垣を見ながら若武者もその方に近づいて行きました。横さまに一目力を入れて之を見る、うの時丁度姫もまたすこし被衣を持ち上げました。

ても艶な！　纖眉に眺の肌。

口をすこし横に曲げるのが癖と見えて、その時も左様して居ました。水もしたゝりさうな目のうるほひ、うれも倏忽の裡に被衣にかくれて仕舞ッたものゝ、しかし若武者にも強く感動を與へました。

若武者は手持無沙汰、綿嚙など引張りながら、さても勝手、今までひどく親しく口をも利かなかッた從者と何か樂屋落を言ひ出す仕儀、それも極めて叟細く！

ほとんど行き過ぎる若武者、それを見送る姫君。背板の小札が唯目につくのに、にくらしい從者は身でそれを匿すありさま。

「喃」と姫が呼び掛けました。

糸でぐつと引かれたやうに均しくかへりみた主從二人。しばらくは無言、目で姫を測量して居て、そしてやうやく從者が前かゞみになりました。——

「此方でおぢやるか。惡々しい錆聲。

姫はうなづき。——

「御渡りやるは誰どの。國方か、東山か……」

「東山でおぢやる」。

「いはれ有りてゞおりやるか、このわたりに？」

「いはれ有りてゞおぢやる。禁裡の仰せでこゝら繕ひのためまゐッておぢやる」。

應答の間、姫はをり〳〵目を外らせて若武者を見と、扨もたぐひ稀な美丈夫！

「卒爾ながら御名は何と召されておりやる？」

「名？」

つないて從者は主人を見ました。で、今まで無言であッた主人もやうやく言葉を出し、

「申すも御はづかしいが、名告らいではまた……窟子太郎重高と……」

「窟子？」　何故か姫はすこし目を見張ッて「……の太郎どの？」

「中々」。

「東山の手におりやるよ？」

「なか〳〵」。

「太儀でおりやる。このやうな詫しいところを氣の毒な……」

「何として！」

けれど實情、やゝ涙をもよほす姫の體たらく、一日も皇帝をわすれぬ心づくしこれほどかと悟ッては太郎も哀れをわかちました。

無言で挨拶をしてわかれ去らうとし、やゝ腰を曲げる、ろれを見ぬふり、姫はすてし太郎に近寄りました。で、直に太郎の從者の方を向き、

「わが身はいちごとて茶山寺の娘でおりやる。」

「すは、辨殿の姫君で？」

「なか〳〵」。

應答は濟みました。待ちかねて居たやうな太郎は直に付穂も無く禮してわかれやうとすると、また變な！　姫は答への禮も爲す、

「お待ちやれ、問ふてとがれりやる。御こたへやるか？」屹とあらたまッて。

「身の知るだけは」。

「さらば御聞きやれ、東山どの〻銀閣とやらん言ふはをさ〳〵三代のに（金閣の事）劣らぬとぞ。まことかや？」

胸に釘！　と見えて太郎は早速に返辭もせず……從者は不思議さうに、また氣づかはしさうに太郎といちご姫との顏を見て居ました。

「なか〳〵」。

「劣らぬとや？」

「されば……御言ひやるとほり」。辛くこたへを付けました。

「まことに？」

「なか〳〵」。

「さて」、人を惱殺する程の笑を含んで、「禁裡もかう爲て置くとは？　東山は……」

ます〳〵笑ッて、「さうでおりやる、聞えた、御門にまゐらせうとて御作りやッたのぢや。喃。で無くて、東山どのも白痴ではおりやるまい、どう心ばし狂ッたればとて御門よりきらびやかな館には住ふまい。さうでおぢやらう？」

太郎は一言もたたへず口は緘はれたか、辭は呑まれたか、かろく點頭くのがまだ切めても。終にたゞ、たッた一言。――

「長戰爭に事のみ繁くて……」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

海とも山ともつかぬ挨拶を辛い楔子として太郎は無理に姫をわかれたまゝ、是も何かの因緣づくそれからといふものは姫の事が兎角心に掛かりました。

世が世とは言ひながら恐ろしく利かぬ氣の婦人。年はまだ二十の下らしいに！顏は蠅をも叱れぬらしいに！　たよわいのに！　やさしいのに！　それで、花かとあやまたれて、香りをも吹くかとあやしまれるその口からあの言葉。柳をはづかしめてさはれば靡くかと思もはれるその身からあの理窟。理窟も理窟、眞綿で頸、燈心で繰純、湯のなかに鹽を持たせた攻めかた。

かねてから浮評に名高い茶山寺の姫御前、賢女との評判すこしも無理では。思へば何より恐ろしい、三軍を身一人に引き受けるにしろ、剛の敵はまた剛で受けられる譯、たゝ柔の敵をどうしてま！

其一

もとより作りは書院、しかしろの見ぐるしさ。禁裡に比べて矢張りと悟るもの……、ただ聞いて、たゞ見てこれが何うして公卿――公卿も公卿、辨ゑのとまで言はれる人の――書院と思はれぬむさくろしさ。

木口を見れば檜の糸柾か、亂れ木目、しかし椽も柱もみな古びてあの頃の世の若者もときな手疵だらけ、承塵に殘る白い痕はすなはち釘かくしの有ッた昔を今でも記して、ろして其釘かくしは――銀にしろ、紫銅にしろ――剝ぎ取られて賣られて仕舞ひました。几帳の絹も手垢ばかり。漆は剝げて、銃の濃菊に摺金の跡も殘らず、絹は色も褪せて、糸もほつれ、ぐたくとなッた様は丁度葱の枯葉のやう、椽から吹き込む風に顫さうに靡いて居ました――吹き込む風、血腥い香を運ぶ。

ろの書院で刀の鞘卷をして居る二人の男女が有りました。

その一人は即ちいちで姫！　今一人は姫の親の右少辨藤原夏代――茶山寺と呼ぶところの。

何のための刀の鞘巻？　發矢、今の世でいふ内職でした。
籐屑やら砥粉やら鮫皮やらで座敷は見る影もなく亂れて居ました。二人が身に附けて居るものを何かと見ればいちご姫のは外出の時のとすこしも變らず、髮はッたのは只家に居るため被衣の無いばかり、夏代の姿は――これで右少辨？――！
掖縫が鼠にかはッたのでした。が、涙！　それでも汚すまいとてか、小簾の緣絹を剝がして繼ぎ合はせた廣布を前垂として居ました。これは親子二人とも。
他目もふらず、口も利かず、一心に二人は卷いて居たものゝ、やがて娘はほッと言ッて手をやめました。
「つかれたらう」。夏代も手を止めて。
「なか〳〵」。言ッて溜息。
「式部の小君（姫の女朋友）も今日は遊びに來るといふてぢや。やがての内、よい伽あるであらうよ」。
つとめて慰め顏の父を見上げて姫は答へも爲ず。
「喃、式部の小君が」。

やはり相手は全く山吹。
「どう爲たぞ。病ばし！　心、地例で？……」
「いや、心、地は常でおりやる」。
「なに、心、地は常？　それでなぜ鬱ぎやるよ」。
いつか姫の目はうるほッて居ました。
「何んぢや、泣く？」持ッて居た卷き掛けの鞘を横へ置きました。
「泣かいで何と……この淺ましい姿ッ！」からくしぼり出した言葉。
「淺ましい姿とは？」
「申すには及びませぬ」。
「このやうなしがない世わたりの事か？」
言ひ申てられるまではまだ嘆きも堰をやぶる力は持たず、が應答の間に意味を荷ッて、わが胸の思ふところまで刺されゝばまた迎へられていとゝ烈しく……
そして全くの無言。たゞ身のふるへ。
「あはゝゝ、女子といふものはあぢけない……今はじまッたしがなさかい」。

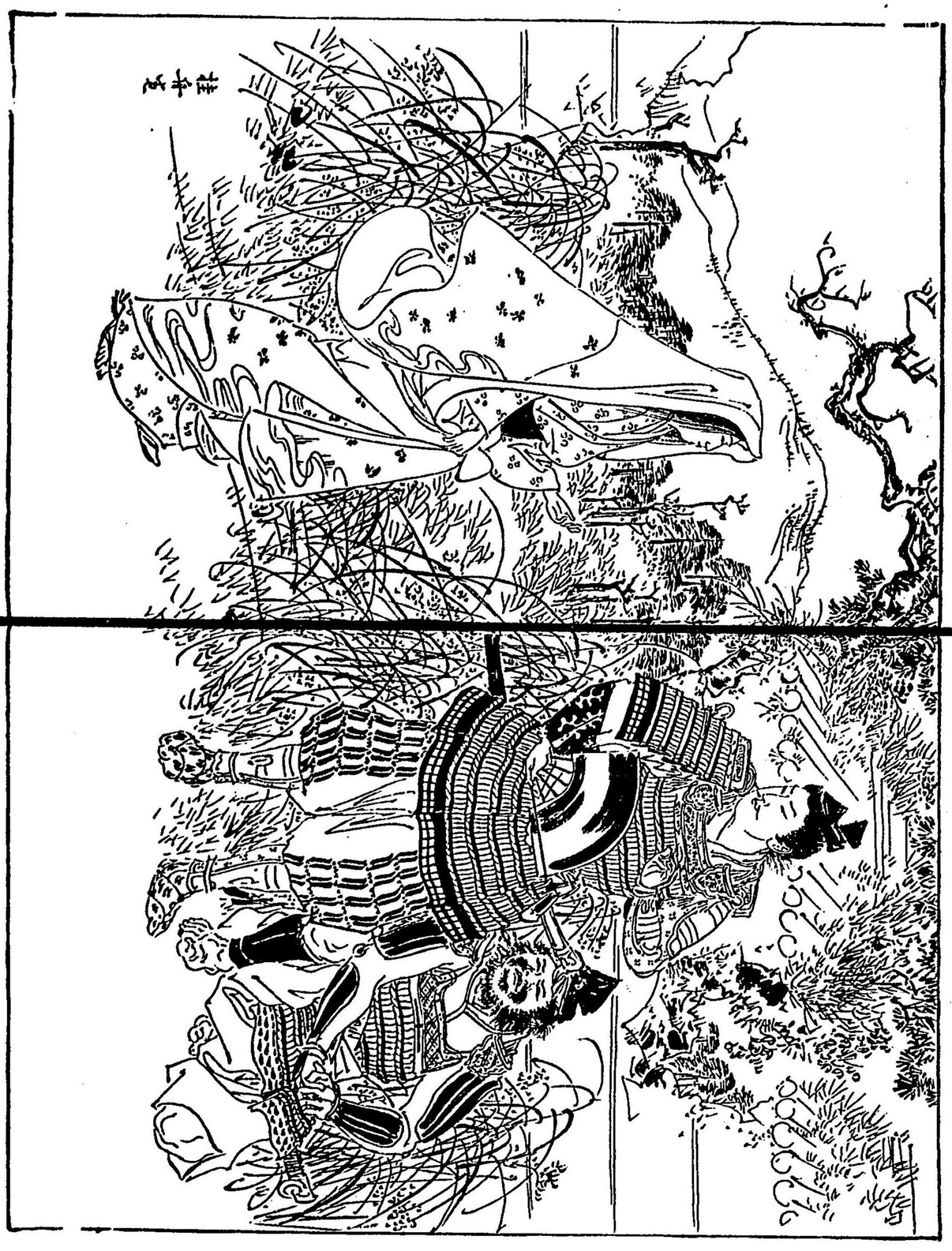
もはや馴れたといふ樣子がいとゞ哀でした。

「もとより。したが、た…たれゆゑと思し召すよ？」

「言ふまでも無い」。

「されぱでおりやる」。涙と共に亂髪をかき上げるうの腿はしさ。「まゞ申し上げいでおりやッた。今日も上からの仰とやぢで窟子太郎が御垣見にまゐッておりやッたが、太郎は人も知るとほり東山の内の垣守り、格を云はば禁裏の衛士にも足りぬ身ではおりやらぬか。ろれが見るからが目眩いばかりの打扮で、有り餘る豐けさも見ゆるではおりやらぬか。妾はまだ銀閣とやら言ふのは知りませぬが、垣守りさへある樣な體、主の驕奢は如何ほどか。ろれもあるに…父上…何と思し召す…上の御有さまはあの體、右少辨の君が武士づらの佩く大刀の鞘卷いてわづかに賃にせうとは〳〵！　しイッ！　父上、これが泣かれいで…婦人ながら妾はくやしうて…」

姫蒐の露には松も枝を共にぬらしました。飛鳥井家なぞゝともに蹴鞠には緑の深い家柄、また香道には指をも折られた格、姫もをさない時から父親からろれら



の作法を聞き及え、その聞き及ねのかたはら歴朝の様子も知ッたところ、天性の心の雄々したは終にしばらくも武家をにくむ情をすてさせぬやうになりました。思ひ出せば初對面から窟子太郎を詰ッたのもまた所以の有ッたこと。

「くやしうても」、父は父だけ、「詮無いことぢや。刃も立たうかい。こないに刀の鞘卷するのも思へばつれない事ぢやけれど、これも時世、御儀式にも事御欠きやる丙裏の御いたはしさ思へば何でもないよ」。無駄な辨ながら。

夏代はすこし改まりました。

「ろの武士、そなた、何日見た？」

「今朝でおりやッた」。

「どこもとで？」

「外の御塀で。咎めましたら東山方で、禁裡の仰で築垣つくろひに參ッたと言ひやッておりやる」。

「ほゝ窟子、あの名高いよい男の？」

けれど姫は横を向いたのみ、やゝ話が横道に入りかけました。が、何故、一旦

答へもせずに居て、ろれでさて却ッて話の逃げるのは好まぬ樣子。ろらとぼけ、

「ろンな浮評がおりやるか？」

「あるとも。好い男で名高いばかりか、學問でも人が褒めるよ」。

「あの壯佼が？」すこし考へ、「したが東山ゆゑ何處やら憎う……」微笑を寄せました。

「さう言ふな。小君なぞは太う慕ふてふてとぢや」。

「小君が？」おろろしく駭いて眉を上げました。

「小君。しちが思ふても離るゝ戀ぢや、表向は睦ましいが、敵味方ぢや。甲斐ない事よ」。

打ち解けた親子、すこし話しもやはらかく爲ッて來たため、やうやく愁の暗もかすかながら晴れて明るくなりました。と言ふのは親ばかり、同じ流には飲みながら牛は寢ても馬は寢ず。なぜか、闇が姫の心に深くなる、目のはたらきは鈍くなッて目蓋も重さうに、ろして、何の仔細、「小……」と聲ひくゝつぶやきました。

夏代は聞き付けた體で、さて別に仔細もたづねず物語りが了ると直に內職にかゝりました。

そして今は二人の間に應答も何もなく靭を卷きながら折々夏代は偷んで姫を見ると姫はまだ物思ふにとざゝれて居る體で、鞘は手に持ッて居ながら指の使ひ方が平常では無い体。

あゝ卷鞘、ろの籐、山に生へて居るときは大木にまとはッて居た籐、切り取られては死物の鞘を卷くはかない身の上。「一年の峯の木枯、小鹿や猿を泣かせたのは愚かなてと非情の草木の復腕をさへ吹き絞ッて、折角の實を雨あられ。落ちた岨道の岩の陰、したゝる清水が命の綱、掩ふ岩がすなはち屏風、それを親とも兄とも頼んであくる春やうやくに貝破れた二葉の嫩芽、わづかに木らしい木になるやたらず、いつか籐にさへ魅入られて――籐、罪な、ろつてい籐、しかし籐の心を思ッて見たら。獨立は出來ぬはかない身分、百年の苦樂が他人と共、まつはッた木の情一つが身の命で、生きるも死ぬも勝手次第。君と共に身もたふれる、君と共に身もろだつ、生涯の友だちと魅込まれたのを諦らめたら、うとまずに香の蔭を貸す櫻も大方有りさうなもの。はじめに見たのが因果の種、どんな前世の結

び合ひか、裾濃の鎧か目先にちらつく。白鳩烏の目釘に玉蘭の鍔――玉蘭は清いもの、誰やらの顔とひとしく、白鳩烏は愛らしいもの、誰やらの物でしと共に。

「わか〳〵しい紫裾濃、褪せる日の有無はわからず、しかし竜胆菜の緑が有らば」もろともに摘む」むつましさの契りは有る事。主の身をかためて一分も透かぬ胴締り、花車よりはいつそ固さうな。不意に詰られても大して動じも爲ず、さうかとて禁裡を無いがしろにする無禮の樣も見えず――あゝ谷の中にも鳳麒蘭、潤川にのぼる若鮎、いづれ憎らしくしか見えぬ東山方の塵塚に猶藏れた珠玉も有れば有るもの。敵と思へばにくらしい、しかし人と思へは懷かしい、ろの苦味を含んだ下ぶくれ、その温厚な君子の風、從者の鬼將がなか〳〵の比べ合はせ、軍陣の虎狼の中一際目立つ象の優美。敵で無くば、いや、もし味方であるならば、味方でなくとも、只の下司であッたとて、女子が心を許すのは誰に向ッて、また何のため。小町の國色はかねて耳にも聞く始末、しかし在五の協はぬ戀にむなしく隔られて戀を知らぬ、それが人か――石か、木か。木にさへ母木といふもある、木どもなか〳〵比へられず。石にも子持石は有る、ならば石とも言はれぬ始末。末世の澆季と知るものゝ、澆季はいつもの流行言葉、昨日の殿が今日の下司、淵瀬のかはりを常と思へば人情に何の相違が有らう。鬼は鬼、あはれは哀、花は花、戀がかならず無常でなく、無常が屹度戀でも無い、千者萬別たゞ一つ粧飾のためにる暮らす世の中。われながら敵をしたふもまた因緣、あきらめる氣、また捨てかねる氣、それに妬くも今聞けば小君がまた其人のため忍んで葉裏に露を持つとか、浮世の義理にはかまはずとも心に鬼も友も住む、その目を避けやうとのみ勉めれば只くるしいのは胸ばかり。

沈む思ひを妨げまいとてか、夏代は更に言葉もかけぬ、それに辛く心も注けばいつか一途に卷き掛けた籐が半分ほども後れました。平帶から貧けじだましい、急いて冴えかへッたやうにきり〳〵と緊めはじめると夏代はまた偷み見て最もいぶかしさうな樣子。その見る親も邪魔なやうな。

處へ、襞が多く立ッた棕色の樣に人の足音。ふりかへる間も無くて現はれたのは夏代の奥、姫の母の綱手。

「いちご、小君が」。昔のゆかしい、しづかな聲がら。

「小君が？」一寸目をねむッて直に開いて姫は會釋、「どこもとへ？」

「和御前に」。

「妾に？　西の屋にまゐりませう」。

言ふ内母は立ッて行きました。一人ぐらゐは下司も使ふには遣ひ無い、それでも奥がこの有さま、右少辨の君の奥が自身に物を取り次ぐとは！

第　三

西の屋といふのを何かと思へば西の離れで、書院と同じく物置とやつされてあるところでした。

小君といふのは式部の司の何某卿の息女で、いちごとは幼馴染、交情のわるくない朋友で常に行きかよひして居ました。今來たのも、それ故、たゞ遊びに來たのでした。元より女が多數の朋友をば持たなかッた時世、世が酷く亂れて宮中の交際も少なくなッた折柄、殊にをさな馴染、二人の交情は實に漆といふ古語そのまゝ、すべて隱さずに物を打ち明けて居ました。

挨拶も濟むや濟ます、既に小君は打ち解け掛けました。が、いちごは毎に無い、

かはッた調子。

「御見やッて」きの字形になッて小君がなまめき出しました、「…を」。

「何？」澁い顏で。

「何とて…いちご御にも似合はぬ、何でおりやる、その千年の松」。

「千年の松？」なまぬるく。

「千年の松は鱗にて、ほゝゝゝ」。

「ほゝゝ」、仕方なく釣り出されて、「松は鱗…御見やッたか？」

「此方からたづね上げたものを…御見やッたか？」

すこしいちごは思案して、

「いえ、見ませぬ」。

「御見やらぬ！　妾は見ましたし。この度で四度でおりやる」。

「御見やッたのが？」すこし荒く。

「なか〳〵」。

「さぞな——和御前の見申したなら——彼方も心ありましたらうよ」。

にやりと笑ふ得意らしい小君の顔付き、いちごはいよ〳〵冷かす氣、――

「罪な人よ、誰やらは。聞く身こそ氣の毒でおりやるッ」。

でも小君は深くさとらず、――

「どのやうな月日の下に生れたらあれ程に清うなるでおりやらう。したが、婦女どものひしめく聲に立ち出て見て驚ろきまひた、彼方から言葉かくるので」。

「何とて」。

「和御前が小君どのかと」。

宜い加減な嘘、さとッたか、悟らぬか、乃至心面白くなくてか、返答もせぬいちご。

「あの窟子を」、小君はます〳〵膝を進め、「戀ひ慕ふのは吾人も同じことと見え、情ひさゞ女の童まで皆のゝしり噪いておりやる」。

いちごは耳をそばだてました、――

「情ひさゞ女の童とは？　かねて聞きましたが實でおりやるか？」

「ほゝゝゝ、いちご御の空耳つぶして」。

「いえ、空耳ではおりやらぬ。妾はよう知りませぬよ」。

言ッて側にあッた双六の――今は用ゐぬ――盤に肱をかけていちごも身體をすこし横にしました。初から他に人目も無いこと、小君もざれた身態、いちごも今は同じやうに爲りました。

殘熱も退かぬまゝ身につけたのは初回にも見えたとほり一重衣でした。幅細帶のしまり緩く、着殺された着物の襞が惹えて片寄りに爲ッて居る儘に、ともすれば知らぬ間に胸も露になッて、乳房さへも見えて居ました。手首から直にぶらりと力無ささうに爲せた手は折々後れ毛をかきはらふばかり。片膝立てにした居住ひの間には膝の曲りが白く、細く透いて居ました。是はいちごの身の有さま。小君のは猶でした。蒸すのにこらへかねたのか、きの字形はいつかしの字とかはッて左の腕を肉のまゝ支へとして足を充分に伸ばして寢轉んで居る、その足は二本ながら肉を見せて、それで坐ッて居て見れば胸はまつたく開け放れて鳩尾の肉の襞が二つ三つ見えるほど。世が世とは言ひながら公卿の息女がこれらの姿！

話しはつゝいて行きました。

「御知りやらぬとは如何な。常から其樣な事には抜けてれりやらぬいちご御が御知りやらぬとは受け取れませぬよ」。

「全くでれりやる。つひ聞き損ひました」。

で、小君は前後をふりかへりました。

「かくさずともの事ではおりやるが、女子は是でも掛念がおりやるよ。情ひさゞ女の童とは外の事でもおりやらぬ。内裏方の女房や女の童はの中に、喃、辻にたゝずんで露の情賣る者が許多おりやる」。

「まてとに?」いちごも目を圓くして。

「まてとゝも。近衛どのゝ青侍、あれの馴れ染めの女房は御知りやるとほりすこしは美人、あれなど辻に立つものゝ中でも名のあるのでおりやる。ろして武士方の一夜妻とさへ爲るのでおりやる。一夜情を賣るからには財なり品なり貰いものを許多得るとか、不思儀や、ろの青侍などこの頃は鮮色の狩衣など着て道あるいておりやる」。

「では浮評ばかりではおりやらぬよ?」すこし逆上せてぽッと爲ッていちごが問

ました。

胴ぶるひと笑顔とで受ける小君、足で足の卒いところを搔きながら、

「浮評どころか、妾は見た程…」

「え、見た?」

「ほゝゝ、築垣の邊で」。

「つ……い……ぢ?」

「和御前と窟子とを!」

あゝ無殘なあぐり方、冷かさうとした身が却つて氷にされました。面を向ける隙もなく、小君が繼いた二の矢の急攻め。——

「御かくしやるとも此のとほり、窟子をしたふのは今の婦人の常。何もをかしい事ではおりやらぬ。内裏の婦人で十五六で男を知らぬものは無いのを、和御前も定めて今までには…」

言ひ掛けたばかり、思い付いた體で懷中をさぐッて取り出したものを何かと見れば美事な抹金縷の印籠でした。

「これは、喃」、聲を低くして小君はいちごの傍へ摺り寄りました。一寸絹の煩を絹の煩に付けて見て、首筋を抱いて耳にさゝやきました、「和御前ゆゑ御はなし申す妾が、喃」、いちごを左右に動かしながら「築垣の處で昨夜一人の國方の侍大將から貰ッたの……」

「なにゆゑ？」

「あら悟らぬ——たゞ窟子へ近づかうと思ふばかりで」。

直に跡は笑ひたふれた仰山さ、此一言はいちごを強く感動させました。自分が望む窟子をば——小君までが、何の美くしくも無い癖に。

からく進んで來た話も今はまた物思ひに封をつけられました。いよ〳〵語り進まうとする小君、言葉を出すたび毎に手持不沙汰になる小君。はては無言、折々に低くうたふ小君のざれ歌の聲。その度毎、折角の物思ひを殺して耳をひそかにそれへ貸すいちご。

すねられて露も女郎花によりかねました。でも氣にもせぬ體。快活にわらッて終に喋を告げて去りましたが、さてその後ろ姿——あれが窟子をねらふとは！

思へば曩刻の偶然の出遇ひ、かねて聞く窟子にはじめて面をあはせたのに、ろれで身は、はづかしい、着馴れの衣にやつしはてゝ居てせめて前から知ッたなら取つて置きの一枚ぐらゐは、被衣もすてしは好いのを掛けたものを。名を聞いて物語らなかッたらまだそれ程でも——しかし、窟子と聞いたからにはその胸の度量もまた試したさに彼是と辨をもまじへた仕儀。それだのに小君はあれ程の熱心をさな馴染の友だちでも今更——ちッ、死んでもでも仕舞へばいゝ。

しかし、とは云ふものゝ相手は武士、武士も武士、東山。國の運命を知らぬ身なら格別、内裏の御いたはしさを御いたはしいと思ふ身が何うして敵に思ひを運ばれやうか。が、倫常は慾の餌食、倫常は全く慾をつなぐ鎖とするものは聖人ばかり。忠義の念も本は愛。愛の隣りは即ち男女。愛が右と左とへわかれるその迫分がつまり倫常と慾との勝負の闘。右が宜からうか、左が至當か。ひとしく兩人を思ふ戀とは歌の題にもある名目、しかし些かはッた須磨明石の双方えらび。「いづれ菖蒲」と引きわづらふ歌の德が有る靜な世なら、または「かりの契りは」結ぶまいと決する男子の心が有るなら。ろれ、さゝやく鎖の牙音！　ろれ露をたゝ

へる誰かの目！　名はいやしい垣守り、しかし、氣高い姿のろの。しッ、目釘の白鳩烏雌か、雄か。綿噛は何處の女が縫ッたものか。白鳩烏もうらやましく、ろして綿噛も妬ましいやうな。無論、無理。しかし煩惱の犬はかならず無理の小屋にやとる――――無理の小屋が煩惱の犬には命。煩惱の犬！　菩提の鹿！　追へぬもの、招けぬものと聞いて何故をあざわらッた身も今更思へば、てもを、さない。家は茶山寺と讀經くさい名であッても迷ふのが卽ち凡俗！

はげしい戀情は溪河の水、おさへれは押へるほど道を求めて突き進み、狂ひ出しては手綱さばきが却ッて馬を止められぬ仕儀。溪河の水の心の水性、跳ふッたてる思の駒、「月毛の駒よ」と源氏で戀はれた、ろれ昔とは反對な。物を飲む咽喉をば窟子が來てつかむやう、物を言ふ口をば太郎が來て縛るやう――――極、絶えた絶頂。

思ひ迷ッた茫然の中、横の廊下をとほる母の姿、見ると先方も側へ來て何か小聲で言ひました。

地震は止んでも津浪は取れず、いちごは聞きろこなひました。猶身を入り込ませました。

「窟子太郎が今まねッて……」母、が。

「えッ！　何」。

第四

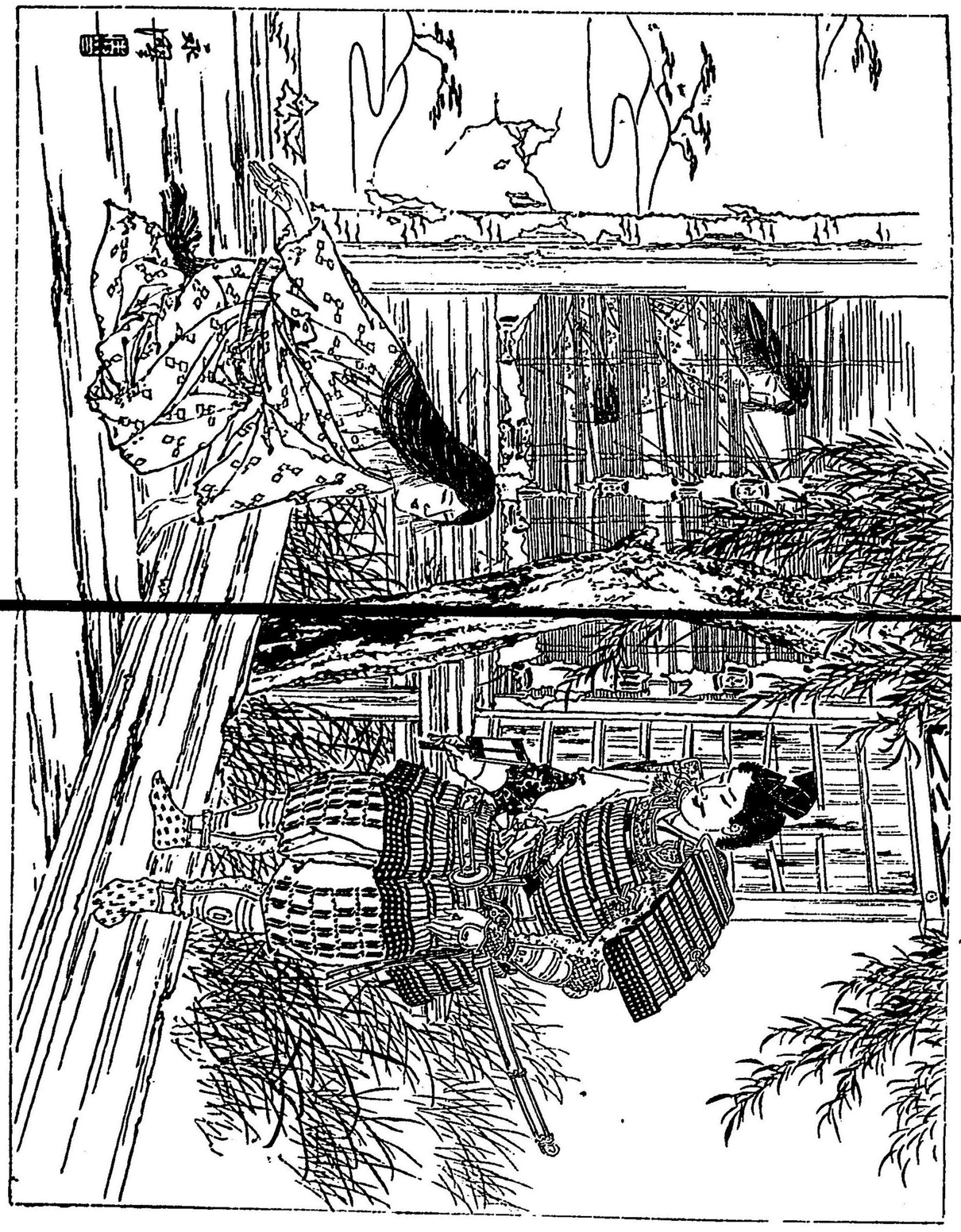
おもひの外に思の中の人が來たとの知らせ、でもまた信けられず、聞直さうとする間に人の氣も知らぬ母親は身をかへしたまゝ端近まで出迎に行ッた樣子、――「こなたへ」。こなたとは何處の事。こゝか、ろれとも父親のところかと憶はず、あら、顏がぽうッ。われを忘れて立上がり、柱蔭から顏を斜に出して入口の方を一目、まだ其人の影の見えぬため、また引返して、何の爲にもならぬながら、手早い、四邊の取片付。片片けるのか、散らすのか、片付ける――瞬間――其下から亂脉はやはり舊のまゝになりました。

やがて廊下に人の足音。すはやと刺客でも忍入ッた樣な身構へ、帶をしめなほすとも直さぬとも付かず、衣紋を繕ッて儘に小褄をきりゝと引いて、待掛けたものゝ、併しそれは早まつた用意、簾から透かせば客は綱手に案内されて奥の書院

へ通りました。「空……何事！」といふ顔色、中腰で足をつまだて、する〳〵ッと簾まで駈寄り、覗く顔で簾にしばらくは高低を起させて、そのまゝ何やらの神に封込められた鮫のやうに塲處をも去らず坐りました。

聞けば洩れて來る、まぎれも無い今朝の太郎の聲、ろして夏代と丁寧な口誼の有る樣子。西の屋を出て竊聞したさは山々、遂かし見たさは堪りたい程、しかし書院の三方はいづれも簾、さいはいに情知貌の凡帳や屏風は有ッたにしろ、ろれまで行く道の無さ――人の家でも無い、わが家に。掬ッた手からこぼれるやうに時々物思はせぶりに主客會話の聲がひゞいて、ろして心を籠めれば籠めるほど嚥になる親と客、いや、客と親との話聲――もしや鸚鵡石でも有ッたなら。考に食盡された跡の滓の身は輕く、たちまち綾でも釣られたやうに首を長くして立上るかと、思へば、また棒を呑んだやうに姿勢をすこしも頽さずに段々と坐ッてしまつたり。

その胸痛々しい裾濃の鎧の人は何しに來たのか、用が有ッてか、また無くてか、公用か、乃至私用か。用があッたものなら築垣で遇ッた時ろの樣子を見せさうな



もの。出來心で尋ねて來たのか。

想像が是だけならそれこそ仙人、しかし、凡夫、ことに凡夫の精といふ十七八歳。

乙女椿を見てはその色にならうと願ひ、白魚を數へてはその肌を貰はうとせがむ此頃の人情、愛や慾は唯自分と自分がなつかしく思ふ人との二人にばかり天から賜はつてあるやうに思ふのが此頃の常の考です。

もよほして居た感情は其人を目前に見て猶嫉になりました。第一に心に呼出したのは自身が美か醜かといふ一點！　自身の醜美いづれかを決めるのがこの場合の空中樓閣の土臺となるもの。

つら〳〵考へれば九歳十歳頃までは誰でも自分が見馴れて居る人の顏ばかりが顏らしく、また美くしいやうで、時に鏡にわれとわが面をわかてば却ッて、見馴れぬためか、わが面が人のより醜いやうにも見えたほど美を見る目が無かッたものゝ、併し其頃から世間の人が自分を褒めて美くしいと稱へてくれたのはまだ耳の底にも殘ッて居て、で、猶今でもまだすこし迷ふ氣持もするやうな。咲く花は

麗はしく、眠る月は奥床しい、ろれは今人並にわかるものゝ、しかし猶慾を心に運込めば一寸は美くしく見える自身の顔もよく見て居る内にはわるく見えて來るやうな心持もする。實にこの身はうるはしい顔なのかと一度われを訝かって更に思を繰れば、一昨年四位の妹御前も「美しのいちご御」と褒めてくれて、去年散位の兼仲も「今小町のいちご御」と言ッてくれた事も有ッて、そして今でも道を行けば人が見て、ふりかへるまで見て、しッ！　見惚れるほど見るところを思へば――其時はいつも澄ます胸に浪を打たせる――やはり何うしても美くしいに違無いのか。

跳ねられたやうに俄に飛立ッて合はせ鏡を一對取出しました。

鏡にむかッて正面から寫し、横から寫し、斜から寫し、下から寫す、うの度ごとに氣色のかはる面白さ。で、さすがに醜くも無い、醜くも無いといふのは自我一流の評では美しいの正反對。それで、ことに我ながら氣に入ッたのは横顔の可愛らしさ。

眉の尾がするどく現れて、睫毛が重なッて、そして鼻道のはじまるところが些

しくゝれてその顔の美は其處一ケ處に集まつて居るかとも思はれるばかりの處は、「まことに小町でも」。風にもまれる花片に形だけ比へられる唇、その色のすてし薄黄がゝッて、そして薄紅づいた風情は――天地はいかほど廣くても――類似の物もなささうな。同じ色の猶一際薄くなつた頬、薄紅色の輪子に似たやうな、横に顔がなればなるほど其薄紅の間、色白の膩が浮いて居るやうにも見えるとは。

「今度窟子に遇ッたなら此横顔を見せてもやりたい」。直に小君が身側へ來たやうな心持。で、小君の顔があり〳〵ともあらはれたやう。あれで何うして窟子などを。一方を斥けて置いて縱横にあばれさせるのは「鏡にうつして醜い」心。

「窟子、あら、何を語る、言葉も洩れぬ。したが、今日を妹背の契りの後と思へば……」

言換へれば斯う考へました。――

「もし今日が窟子と○と緣を結んだ跡で、窟子が勤に出る前、貞と何か如此相談して居るところであッたなら、その嬉しさは何程だらうか」。

真心には聞かせられぬやうな空想、それは空想と知らぬほどでもない、空想を

いだいた下からあゝ空想と氣が付きながら、猶多少はうの空想をやしなふ樣な工合でした。それを叱るらしい良心の聲も聞えるやうな、しかし、其聲もすこし皺枯れて聞取れぬやうでした、たゞ情の深いばかりで。

餘處からこの考に沈んで居るところを見たらうも〳〵何んなか。咔子は何とも無しに只目の中心に坐ッて向ふを向いて居て、うして手は感覺だけ身體から離れたやうな體で輕く、實に竊と――蛛蜘の巣でさへ支へさうに――膝の上に載ッて居ました。何を焚いたのか、餘處から舞込む烟さへこの部屋へ入ッては變に澄まして落付いてさまよひました。

どうしても混入ッた密談と見えて書院の會話は中中終らず、今か今かと待つ内に何うか角か主客二人の聲が裂けたやうに、高くほとばしッてうして窟子も立上がつた樣子、鎧の音ががさつきました。

しッ、歸るかと活返ッたやうな身振になッてやゝ身をば蹤の陰へ潛めかけたものゝ、素より初對面から窟子を詰つたほとの處女、胸の考たけは花のやうにかよわく有つても、さて心は太く、思直して見料らッて居て……

その間も無く、はたして太郎は暇を告げて書院をはなれて出て來る、其處へ偶然めかしていちごは簾をかゝげて出ました。

が、心は朝の時より充分よわく爲つて居ました。利かぬ氣では有りましたが、さてつひ言葉がまごつきました、たゝ頭のみすこし低れて。

出たらば大方まづ窟子から禮をして言葉を掛けるだらうといちごは考へて居ましたが、其豫察は違つて相手はじろりと此方を見たばかり――聲も出さず……

玉と思つて、掴んだのは案外な石、氣を抜かれて睨めて居る内に先方は最早背中を見せました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「吾」といふ事は宇宙の命、衣通だつて頻がすこし廣かつたなどと言ひたがる世の中、色々に證據を求めた自身の顏の美くしいところ、それ紛れも無い。そして男子は美人を好む人情、ならば窟子が挨拶ぐらゐ爲ても宜さそうな、と思ふばかり、何か烟にまかれた心持。しかし辯護は疎まれたために容易に無くならず、疎まれまいと思ふ處から多く生まれるもの。窟子が此方を疎んで(?)言葉を掛なかつた

のが憎いといふよりはいつそ言葉を掛けられるやうに爲りたいと思入れば、自然辨護は窟子をも掩ふ、「耻ぢたのだらうよ」。

しかし、何の用に窟子は來たのか、ろの聞きたいのは面胞が出るほど、「耻ぢたのだらうよ」と辯護を自分で付けるのを待兼ねて夏代の部屋へ行きました。

見ると夏代はいちごを上目で見たばかりで差俯向いて居ました。まづ氣には掛かる、が悟らぬ氣色で、

「まねりました」。

「來ずともの事」。夏代が目を舊のまゝに据ゑて見もかへらず。

「なぜでおりやる」。側へ膝をさしつけて坐りました。

「武家の自恣はあれ程かな。何と、思の外な、和御前まだ知らず」。

「なか〳〵知りませぬ」。

「まれ綱手呼びやれ」。

で呼ばれて綱手も來ました、これも不審さうな顏で。

揃ッた二人を見るや否や、いつか目をしばたゝく右少辨、いよ〳〵合點の行かぬ二人。夏代は終に口を切りました。

「外でもないが、あの窟子が思ひの外を言ッたよ。東山の自恣は何處までつのらうか、東山の自恣は。どうしてこれ程に御所はれとろへたらうよ、！哺」

言ッて溜息、肝心の筋は何處へやら。樣子の意味ありさうなのには聞く二人も無我無中になりました。

「何を御言ひやッた？」母が。言葉を儉約してた黙ッて目で同意を見せて居るいちご、その內心には多少ての考も有りました、「困ッた、わるい事言ッたか」。

「何をとて呆れたよ。かうぢや、よく御聞きやれ、何事の面會かと思つたら、東山からの旨であの窟子が忍びづかひに來たのぢや。何の忍びづかひかと思ッたら……」目を見張ッていちごを見ました、「いちごを妾に上げいと言ふ」。

さすがに聞く二人も化轉して「えッ！」と言ッただけ。

「義敢の切な所望ぢやと。茶山寺の姫の容色をかねて聞いたが思の種で、恐られぬまゝに使おこせたと言ふよ。表立ッた使では禁裡にも憚りが有らうとて忍にしたとの事、うけがへば事に不足を爲せぬとか」。

が、混上げるくやしさに跡は言切れぬ、それも無理では無いことゝ言ふにも言へず相手の二人も言葉は無い、それを嘲りがほの夕日の蟬、雀に逐はれてか、飛びながら斷續させる聲が二つ三つ。

第五

坊主が憎ければ袈裟までの比喩にもれず、親たちは義政をにくむのあまり、ろの言葉を侍へに來た窟子をも噛碎くそに貶す、それも人情元より無理でなく、よし貶さうが、貶すまいが、相手は敵、いちごに何の痛さ痒さも無いこと、とは知りながらしかしまた酷く貶すのをば聞苦しい心持もしました。

東山の義政は無禮な男子、驕奢の果は公卿の息女にさへ枕席をはらはせやうと言出た、それは餘りと思はれても、併し望まれたいちごに取ッては多少その間われを慕ッてくれたのかといくらか可愛らしい氣もしました。窟子は成程いやな仰をつたへに來た、しかしそれは主命ゆゑ決して憎むにも當らない、斯う辯護をつけました。

「いちご、そなたの思はくは？」と夏代が聞く問の裏にはかならずいちごも承知

しまいとの心を含んで。

東山は怨の積る敵、そこへ何うして行きたいもの？　決して行きたくは無い、が、もし行けば始終窟子の顏を見る便宜は有り、人の枕席に侍ること、いちごには左程恥かゝやかしいことども思はれず、むしろ氣樂でいゝかも知れずと考へられた、それにしろ眞逆に義政――昔は下地と言はれたものゝ――ところへは。

髮眉ないちごの返事、親二人も不審と目をば付けたものゝ、なまじひに心の奥底を深くあなぐッたなら、もと〳〵世の雨にいたみ、月にひそむ花とは違ッて、處女とは言ひながら利かぬ氣の、早にもおとろへぬ質の葉鷄頭、何か我意を言出してどう風向がかはるか知れず、ろれではいはゆる蜜を求めて蜂に螫される譯、手を付けぬのが上策とやがて親子の間の相談はわかれ〳〵に爲るも同時、さすがにいちごも手持無沙汰庭へ出て行きました。

やゝ些し前までは東山に薄紅の髮をしぼッた夕日も既に消果てゝ、明日の天氣を約束する夕紅が名殘に雲をいろどつて、古代更紗をむしッて居ました。いつか早くさしのぼッた月はまだ光を放つ力も無く、見立てれば中空で休息するやう、

漸く十一日の形どゝのはず、欠けたところは情無く折朽ちたやうに漠となッて居ました。木らしい木は見えぬ蓬生の庭、それながら昔の歌合を忍べとか、蜩も四聲五聲鳴きに來て、蟋蟀も澁ッた舌打をする樣子、長く曲折なく引張つて鳴く鵑さへ何やら沈みがちでした。

この庭は內城にわづかしか隔たらず、漆も既に半ば埋まつて、ろれ故漆づたひで內城へも這入れるところ、それで聞けば庭づたひの草叢の果に人聲がするやうでした。

草は思ひのまゝに生茂ッてほとんど道をふさやばかり、しかし物數寄の心に驅られてはいちごも、元元大膽、そこを撫はず手でわけ〳〵その聲のする方へと行きました。行ッたのは別の子細でも無く、小君が話した辻君ででも有るか、たゞそれが見たいばかり。まだ熱を冷ますさぬ草の息、あ、絹の頬もあらびやうに。

聲のほとりに近づいて、雉子を狙ぶやうな身がまへ、屈んで草の莖の間から向ふを覗くと、果たして人、二三人。具足掛では有つたものゝ、多分は雜兵、並の鎧を着て居る樣子。で、洩れて聞けば相手は矢張一人の婦人、それで酷く捫擇する

る體。

「心づよい女、まだ蹴くか！」

人殺か、蹴くかとは。いちごは猶耳を立て、目を凝らすが、たゞ草を蹴散らす音。

「丹波、足を。」前の男が相手に心付ける樣子。

「轡は？」丹波が返したらしい聲。

「大事ないぞ。ちよッ、女！神…神妙ッ。」

「これ、足、女――おのれ蹴るか。」

揉合ッて居る內、やゝいちごの方へ皆々寄ッて來る、その途端、あら、白い物！白い物、かよわさうな女の足！蹴らうとひらめく白い足！

下杖の雪を推す松の拳、骨太な雜兵の手が見る間に足をおさへ付けて、やがて手が離れたのを見れば既に足は縛られて居ました。

匈引を初から悟ッたものゝ、いちごは動じもせず見て居るまゝにやがてこの體。しかも女子の泣聲は猿轡を洩れてかすかに聞えるのもまた無殘。救ッてやりたく

は有ッても腕づくでは迚もかなはず、思案をめぐらす間も無く、雑兵は總數三人、女を胴で昇上げて、發矢！ いちごの方へ歩いて來て――瞬く間――いちごと顔びつたり――さすがに驚いて足をも止める。

見れば縛られて居る女はいちごが知合の局、葵典侍！

見れば草叢から出たものは凄いほどに美くしい少女！

しばらくは双方無言。身は全でしどけなく爲ッて居るその、その、ろの羞かしさ。葵典侍はいちごを一目、知合の人に耻かしい姿を見られるのは死ぬよりも拙つらい！ 身をふるッて昇かれる手を拔けて下へ落ちたものゝ、しかし、あゝ、着物の甲斐も無い事！

胴ぶるひ一つ二つ、尻目にそれを掛けていちごは突と寄りました、先へ立ッた雑兵の手許まで。

「誰どのゝ手か？」すッきりと言放つ。が、直に重ねて、微笑を帶び、

「かよわい女子を何に爲る！」更に一息の間にまた語を繼ぎ、

「局から連出して何處へ行く？」

しかし答へぬ雑兵、互に顔を見合せて、「この獲物は」と言ッてうなづく樣子。が、氣高さに恐れて荒く手も付けられず……

「窟子の手でおぢやるが、何と仰せらるゝ。この女子は倫取りまひた。」

「窟子？ 太郎か？」

「言ふまでも無く。」

いちごは勢籠んだ體、直に言葉もかへさず、しけ〳〵としばらく葵典侍をながめて居ました。

「その典侍どのを」、前の見幕に似合はず笑を含んで、「御ゆるしあれ。妾が代りに立ちませう。」

ても不思議な空合、通な少女も世には有るもの。たゞ驚いたばかりの雑兵。

「疑がひやるな これ御覽じろ。」

とう爲るかと今更雑兵も氣を飲まれてすこし逡巡するばかり、胸をはだけらせて見て居れば、いちごはたちまちわが上帶に――あら手をかけて、しッ、ろれを解く――解いて手繰ッて、ろの時は瞬間、帶を投出して一つ莞爾、「何處をでも御縛

りやれ。

今は雑兵もきまりわるさ！　初心に笑ッて帶を手にも取れず――内心は薄氣味わるく。あら、狸の出さうな、朧々とした夕暮。變に吹く生ぬるいやうな風。

何を思ッていちごがかう言出したかはいちごより外に知るものも無く、葵典侍さへもがくのを休めてうつかりと爲ッていちごを見詰めました。急立てるいちで、今更雑兵も夢に夢、終に葵典待をば赦すと決めて、さて、强いていちごに其代りに來いとも言出せず。

放飼にあッて禮を述べる思案もなく、葵典侍は跡をも見ずに行ッて仕舞ふ、赦しは赦したものゝ、雑兵も今は胸安からず、葵典侍が逃げたからには迚も黙ッて居る譯は無く、いちごを今度は助けに男子をつかはすのは必定、と思へばいちごの顏が、そのうるはしいのが却ッて凄し、而も冷笑われるかのやう見えました。

「こや」そろ〳〵と立去掛ける雑兵を呼駐めたいちご、變に笑ッて、「なぜ逃げやる？」

「いや、逃げは……」

「さらば妾も御つれやれ。こゝ御縛りやらぬか。」言ッて裝をかゝげて足を見せました、片手では着物の前をれさへてしどけなく。

雑兵は聞かぬふり、いちごは跡から續きました。雑兵は早足、いちごもまた早足、折々にふりかへれば風はいちごの着物をひらりひら。

「まだ御續きやるか？」屹となッて一人の雑兵が足を止めました、しかし荒々しくは無く。

「なか〳〵。其所たちは窟子の許まで行きやるであらうが。」

「なか〳〵。」

「さればこそ、連れてたも。」したしさうに三人の中、見れば帶は既に緊めて身體はきりゝとして居ました。

いよ〳〵雑兵は當惑顏、――

「ろれは何うあッてもなりませぬ。窟子どのは若いに似ず禪とやらに凝ッて物堅い人でおぢやるから女子をつれてはとても〳〵。」

「なに」耳をそばだて、「物堅い？」

「なか〳〵。」

「ならば何故先刻には女子を。」

「あれは窟子どの〻知らぬ君でれぢやる。辻の人と言ふても大事れちやらぬ。」

「其所たち妾を知ッて〻か？」

「知らいで何と、いちご御ぢや、東山どの〻思かけられた。」

「知るまいと思の外に既に素生を知られたとは！

ところへ、不運、横から突然出て來た窟子。

第六

かどわかされた積りで窟子の許まで行つて見やうとの、いちごの考へは途中で窟子に出遇ッたため料らず破れかゝりました。何を目的に窟子の許まで行かうと思ッたのか。謀がやぶれなかッたら何うしたのか、何を思ッて操を輕々しくしたのかたゞ見てすこふる奇怪でした。

いちごの親たちの言葉に從へば、姫は年寄りも叶はぬほどの烈女でした。女の子の十三四から上、眉が伸びて色が白けるのは何のため。すでに此等には世界は

大きな化粧部屋、靡く柳は身振の師匠、歌ふ鳥は作り聲の師範役と全く變はつて、前の野の摘草、裏の澤の螢狩、すべて百年の友だちを撰み拔く處となる、その肝要の瀬に立つ身がたとひ後世の切火かち〳〵備餅三つをあたら荒神に捧げるほどの緣遠い身にはならずとも、旬に食べれば鰯も大牢、實れ口を早くと求めるからには一般に喜ばれぬのを擇むのは無駄——即風は舟子に嫌はれる理——つい馬爪の剽輕も龜甲の温和と見せ掛けるのが世の中の常。ろれを其邊には頓着を忘れて、男は男、女は女と美事悟ッたあつぱれ娘の見識、親ながらも昔はづかしいとの事で……

いちごは男を男、女を女と悟ッた？　或は左樣、併し評し換へればいちごの目に男女の區別は無く、有る事は有ッても、男女によッて動ずることは無く言はゞ人を人臭いとも思はなかッたのでした。

試に物の哀といふやさしい情の奥底を探ッて、ろの哀の催す初心の日を問へば、すべて男は女を氣味わるがゝ、また女は男を危んだもの。郭公、鳴かなければ斫るとは男の地金。郭公、鳴かなければそれで宜いとは女の本性。男女心の根を遠

へたからには、たとひ貸した肱枕の夢を樹蔭の車に載せ合ッた交情にしろ、造化をしのぐ哲學者で無い上は、男女たがひに心をば知り盡くせぬもの。打ち明けてまッこの通りと相手の腕に紫を噛んでも、しかし約まるところが盲さがしで、蝦蟇をつかんで巾着と心得る類。まして慾の働きに情の手傳ひ、驅られ驅られておづ〳〵不案内の暗路にさまよふからには兩方に分かッたやうな、また分からぬやうな心持ちの爲るのは道理の事で、緣が結ばッて夫婦が出來れば、蛇も馴らすと手襟になり、やうやくに親みといふ物が利發顏で出て來るやうなもの、しかし前日の氣味わるさが城を明け渡して仕舞ふのは中々の事、御互に「だらう」の錯定で暗闇の分韻もどき、探ッて中らず、しかし中て、尋ねて逢はず、しかし逢はせて、おのづから双方が大得意、それを名づければ、すなはち愛情。是が普通、たゞいちごばかり闇は違ッて居ました。いちごには男も氣味わるく思はれず、却ッて珍らしく思はれました。男の眞の性質、それが女と相違して居るのは何の廉だと會得したか、どうか、それは不分明。しかし、いちごの心では全く分かッたやうでした。

そしていちごの分かッたのは男の中の一部ばかりで無く、男全體に及んで、馬

の口を取る下司も、紫の素袍を着る高貴も同じやうにしか見えませんでした。立ち並べて鶴と烏とを比較すれば如何にも鶴の方が烏よりまさッたやう、が、悟ればいづれも、いちごの目には、情の動物でした。烏には烏だけの情もあり、鶴には鶴だけの愛も有り、萬象いづれも公平に出來て居ました。時に不圖思ひ入れば、犬でも、猫でも、草木でも、もし互に許せる境遇ならやはり人と同じやうに思はれました。この邊の考へは只思はれたばかり、自分には何故さう思はれるか悟れず、たゞ有無の中に漠として居ました。飜ッて虚心に立ち戻ッても、自分が(思ひ切つて)禽獸草木を偕…老の相手にする氣とは自分ながら考へられは爲ずたゞ折々博い愛情(迷?)慾? 不德?)が心の内を浮き足で、うしてこそと互る心持ちが爲るばかり。世の中の男は、汎く言へば、世界の雄は殘らず自分には分かッて居るやうで、それ程に却ッて同類の雌の方をばまだ解し得ぬやうでした。普通の人がはじめて男女互に批評する時には大抵男は女の劣ッた點、女は男のわるい廉にまづ目を付ける、それといちごは全く反對して、むしろ相手のまさッた處にのみ目をつけました。男は女より思慮が深い、男は女より力が有る、男の中にも美し

い人は有る…かういちごが考へた果は一般に男は女より何うしても優ッたやうにも見えて、そして自然に、名の付けやうも無い、妙な理想が湧いても來ました、どことなくいちご自分ばかりが女の餡を集めたと思ふやうな理想が。この考へが起るや否や、更に第二に續いて、不思議な自信の念が有りました。人の評を經とし、更に自身の最貧を緯とすれば終に世の中の男子の目的となる物は自分の外に有るまいと思つて來ました。

かう考へて心から男を尊ぶ、ろの極はいちごも自然に男らしい眞似を好んで來るが唯虎を描いて猫にも似せられず、却ッて別の異形の物をこしらへるのが多く有ること。皮相から男を觀察していちごが男を學んだ結果は終に奇激な婦人となりました、一寸見たところだけ男に似て居て。

そして女の男らしい、否、男めかして居るのは却ッて世の、多數の男の眞の愛を減らすとは更に考へませんでした。多少考へました。が、それを打ち消す辯護が有ッて、すなはち女がつゝましくするのは女が男に阿びるので、才と色とに欠けた女なら知らぬこと、自分のやうな、兩方揃ッた天成の美人がそれ位の事に心

をくるしめるに及ばない、これがその持論でした。しかし、自分が男らしい眞似をするのは全く見えを離れての事か、或は矢張り普通の女が男に阿びるのと五十歩百歩の間にあるか、其處まで些しは考へも仕たいやうでしたが、面倒だとて猶深く究めませんでした。

活潑に身を行へば、人目にも烈女と見えて、またたとひ何のやうな男にも怯めず思ふまゝを言へば、人もれのづからろれに付いて喋々しました。

それは普通の婦人の出來ぬこと、と人も言ひ、自分も思へば、その心が一轉して、何でも人の爲難い事は爲て見たく、爲て人をおどろかせたくなりました。人をおどろかせて、人が物怪な顏をして自分を見詰めたり、また往來で人が自分を見てひそ〳〵と何かざゝやいたりするが聲へやうなく本人には嬉しい事でした。

いちごに就いては善惡の評か互角でした。唯概して言へば、女は多くいちごを貶し、男は多く褒めました。いちごの性質も完全では無かつた、しかしろれを女が攻擊したのはむしろいちごが世の男に多く褒められる、それを妬んだためでした。で、男が比較して女より多くいちごを褒めたのは唯いちごがうるはしいのと

物語りして話しがはづむのと、この二つ、思ばいちごも幸福のやうな、又でも無いやうな。

つひ、それゆゑ、いちごも女とは交際を厚くせず、わづかに小君くらゐが何處やら男めいて居るといふことで莫逆な友となつて居ました。が、不思議には其割りにいちごの男友だちも又多くは無く、いつでも一人か、二人で、そして其友だちは年々、月々のやうに新陳代謝して行くこと、是が餘程妙でした。

是等がいちごの性質の概畧で、すでに是程、それゆゑ敵味方の愛憎は兎に角、自分を望んだ廉に於ては流石は内心義政が酷く憎くも有りませんでした。憎く思はぬ、それと同時、妾といふ一事が思ひの種となりました。世の中では多く妾をいやしむ。いちごには何程考へても左程思はれませんでした。妾は女子の操を人界から捨てた人、とは知つても、操を捨てるのが何故あるいかは不審でした。妾と妾とは名目が違ふだけ、名目に驅られるのは悟りがまだ開けぬのであらうと考へられました。操といふこと、言へば左樣言へるもの丶、元々取り留めの無い樣な——常磐の子が（偶然に）英雄に爲ッたため後世でも常磐の操に理窟を付けて兎角褒め立てるもの丶、もし三人の兒が病氣でも死んで仕舞ッたなら常磐の操は立たなかッたのか、こゝまで言へば既に判斷の筋も曖昧になッて來る仕末ろの操とは何を言ふのか、との意味で操といふことを疑ッて、ろして疑ッたまゝを道理と假り定めると、終に操を見捨てやうが、見捨てまいが、ろこらは人間の勝手にあると思ひ込むやうにも爲ッて、いよ〳〵妾がいやしくも無く思はれました。

妾はいやしいものでも無い、美福にしろ、藥子にしろ、それだけの名は後世に傳はつて居ると思ふ程ます〳〵妾の境界は無面白からうと推し測られました。氣に入らぬ相手は否、しかし相手が自分の氣にさへ入ッたなら。もしまた其相手が否になれば別に新奇なのを擇むのも譯の無いこと。どうしても妾は妻より氣樂らしく思はれました。

が、唯今の場合で相手が死ぬまでの敵である事、これが流石に胸に答へました。浮評で聞いたところでは、東山の義政は色が白くて背丈の痕が奇麗に殘ッて、それで白の帷子で銀襖を後にして坐ッたところは中々見萌えが有ッて、繪にでも爲たいと言ふほどの事、又一方に於て驕奢の病は有るもの丶、人を憤けるには中

々得て居るとの事、あるひはろれも左様であらうその人が自分を妾に……あゝもし敵味方の間で無かッたなら……

うれに窟子は中の警固役、あの顔で淺黄の素袍でも着たなら嘸かしそれも見榮は有りさうな。

これや彼や、良いやうな、否いやうな心持ち。兎角はかくしく親たちには答へず唯分別なしに散歩に出掛けた途端、はからず窟子の手のものが茨典侍をかどわかさうとした始末。

人の意表に出たがるいちで、つひ不圖思ひ付く。雜兵は窟子の手、すなはち是から連れられ行けば窟子の許まで自分も行かれるには決まッて居ました。窟子は何となく慕はしい。しかし此方から馬鹿に節を折ッて甘口を言ふのも些癪、偶然からして窟子の許まで行くには雜兵の手を借りるのが上策。かう考へました。窟子は子の許まで行ッて何うするつもりか、それもいさゝか思案が有り。が、その思案は此時第二で、ほとんど心の中では完全の形を爲したやうで、そして取り留めやうとすれば又爲さぬやうでした——すなはち、事に因ッたら義政の望みを容れて

——獨斷で——承知して、そして……その跡は目的の鄕が雲か山かとなッて居ました。

で、雜兵につれられて窟子の許まで行けばそれで澤山。もし其途中で雜兵が亂暴でもしたら何う爲やうなど、女らしい考へはまづ催しませんでした。

途で亂暴をされたらそれまでのこと、かう高を括ッて居ました。

たゞ得意といふだけ、それゆゑ、いちごが妙な事を言ッて雜兵を威したのは是ぞといふ取り留まッた考へが有ッての事では無くて、むしろ一時の戯れでした。戯れ、年頃の女が戯れと言ッて濟まされぬところの。

そしてまだ窟子の許まで行かぬうち、不圖窟子と出遇ッて仕舞ひました。窟子は合點の行かぬ顔、いちごを一目、しかし雜兵に言葉を向けました。

「何ぢやのゝしり噪いて」。もぢ〳〵する雜兵を目瞬もせず見詰て、「誰にゆるされて此邊さまよふ?」

「窟子どの」。無言の雜兵を尻目にかけていちごが窟子を呼び掛けました。

雜兵は手に汗。いちごの無言が賞罰の境目——見れば色もかはらぬ姫百合の

姿！

「今朝ほどは」。姫が重ねて、「申入れたい筋有ッて方々につれられて參りました」。

窟子も今は丁寧に！

「左様でおなやるか。申し入られる筋とは公のでおなやるか、ろれとも私ので。私のならば受けられませぬよ」。

でも氣強い、かはりもの！ と言ひたさうないちごの目付き。

「私のでおりやるが、また公のでおりやる」。

窟子はすこし思案する體、——

「今朝ほどの事の御返事でおりやるか？」

「いえ」、いちごも些し考へて、「ろれでもおりやらぬ兎に角……」 言ッて首を低げました。

何か思はくの有りさうな姫、で、いよ〳〵思はくが有りさうな窟子、太郎もしばらく黙ッて居ました。が、終に承知しました、毎に似ず苦々しい顔付きで。

第七

どうしても窟子の心がいちごには分かりませんでした。

伴なはれて行く内に日は全く暮れ切りました。軍後とて途のわるさは言ひ盡くせぬばかり、燒杭や瓦片が蛭卷だけしか殘らぬ鎗柄やひさげ割れた矢と共に途端に横はッて居て、あるけば種々の響きがするやう、途のわるさに折々轉びかゝるいちごを——顔にも似合はぬ——助けやうともせぬ窟子。はかどらぬ女の足、ろれを知ッてか、それとも知らずにか、早く傾く上弦の月に按内を許したばかりで窟子は後をも更に見ず、いちごの續く續かぬを問はずに。

が、家まで行き着くや否や、窟子の待遇はまた變はりました。跣足の水を酌ませて、椽に上げ、そしてあら妙、いちごの手を取ッてやさしくも按内しました。夢か、現か、ても途中とは反對な。ろれもあるに、猶不思議は、色々に絲を採む樣子で窟子がいちごを通す座敷を撰んだ事。

そして終に案内した處は極めて奥まッたところの疊數六枚ばかりの小座敷でした。それで二人さしむかひ、薄暗い蠟燭ばかりがてら〳〵として居ました。

此處に至ッていちごは狐につまゝれたやう、流石に敏い婦人ながら兎角の思案

も付き兼ねて、いはゆる逆手をつかへば鳩も鷹に克てる譯、はからうとした身が何か料られたやうで、今は付き穂が無くなりました。

「わからぬ、いみじく稀有ぢや。雑兵の手前で如此であッたのか。それかとも思ふが、分からぬのは公か私かと問ふたことぢや。私ならば受けられぬそれまで問ふた人がたゞそれだけの答へで諾ッたのもまた稀有ぢや」。

さとりかねるまゝに不思議を凝らした目で窟子を見れば、なほ意外、手まで引いてくれた親切には似ず、笑顔といふは毛で突いた程もなくやがて姿勢を充分正て、——

「申されうずる筋は何でおぢやる？」

虚に乘ずる虚、嫩風は暴風より花がしぼむ。もと〳〵此處まで來るまでは「も し間が好かッたら…」と人には聽かせられぬ内心の秘密が有ッた、その秘密は今でも決して無くはならず、むしろ、言はゝ、ます〳〵燻、が、直おいうれとは口にも載らず、また多く身振りにも出ず…

やうやく僅に一言、それも色々前後を爭ッた跡、——

公のではやらぬ。變にうごめく唇の端。

「公のでは？」直に窟子が。

「ほと〳〵私のでおりやる」。　思ひ切ッて言ッた、ろれでちと胸も坐ッたやう。

「私のでおぢやるか、まことに？」

「なか〳〵。思ふ子細が有ッて和主を欺きまひた。御氣の毒と思し召すか。腹御立ちやるが」。

すッきりと言ひ放して、中々覺悟、骨もとろけさうな笑顔。が、たゞ不思議は何のため、じつと窟子は目を眠る。

「氣の毒でもおぢやらぬ。また腹も立ませぬ。たゞ、それならばこのまゝ御歸りやれ」。

「歸れ？」

掛け合ひの一段落、言ッたばかりで双方無言。たゞ蠟燭が規則立ッた涙を澄まし顔で炎に打たせて居ました。

「他言ふのは」、窟子が、「嫌ひでれぢやる。私の事ならうけたまはる所以ぢや

らぬ。とくとく御歸りやれ」。

「事が濟めば歸れと仰やらいでも歸りまする。たゞし公にしろ、私にしろ、申し上げうと思ッただけは聞える心でおりやる」。

で、覺悟を定めてにじり寄ました、寵子の傍へ。そして樣子を見る、見てもしかし中々に動じもせぬ相手の體。見るからが、おのれやれ、食ひ付きたい程の男振り！

「公の事も申しませう、私の事も申さいで。承はれば敷嶋の道に暗からずれりやるどの事、ろれについて御問ひ申しませう。死なず戀わたる心が哀か、戀ひに玉消えるが哀れでおりやるか？」

問はれても捗々しくなく。言葉より先に寵子の目は相手を下に見下しました。

「いづれとも申されますまい」。ても當り前な：

「いづれともとは？　同じと御言ひやるのか？」。

「同じではおぢやるまい。同じなら比べる迄でもおぢやらぬ」。

「ほゝゝ、中々」。

なか〳〵取つて掛かれません。笑つて見せても先方は平氣、さすがのいちでもくたびれました。

變、妙、頭から尾までが全で不思議の塊り。このくらねに寄せ掛けられたら些しはその心も察しさうなもの。ぢれッ…本當に小ぢれッたい。羽でむづ〳〵くすぐられるやうな。何の因果か、ろの姿が目について〳〵忘れられぬまゝ、敵吠方の隔て心も曖昧の中に煩惱に消されたやうに爲つて、出來でゝろで切めてその人と只一夜しみ〳〵と話しをして見たく、それでやうやく傍まで辿づけば、しッ：、物思はせぶりな、何の事、さしむかひの奥座敷に、しかも泣き入りさうな蠟燭が只一本、ろれで膝と膝突き合はせても動きもせず、目ばかりが宛もいやしむといふ體で人をぢッて照らして居て！

「これも恥ぢたのだらふか」。しかし、膝の感覺でも分かる、寵子の膝は塵の飛ぶほども震へ動かぬ樣子。そして顔色さへ既に冴えていとゞ白く見えて、見て居れば居るほど顔がきりゝと緊つて行くやうな。

殿上の人たちとは夜深くまで物語りをした經驗も有る身、ろの手段を應用して、

ろれで些しも甲斐の無さ。かうして、かうして、ろれから斯う、行く途は有つても目的には至れぬ不手際。今さら、迷ひの惡戯か、女は女だけの品格を高く持て自然の、眞の、清淨な愛情を買ふのが專一との心も、無殘、ほとんど無くなりさうに爲つて、遊女か何ぞのやうな心がむら〳〵と催して來るやうな心持ち。今までは、ろれでも、多少女らしい見えといふ思想も有りました。が、今はそれさへも無くなりました。

今となッてもつとも頼もしく思はれたのは風に揉まれる蠟燭でした。横の襖の間から夜風は中々はげしく吹き込む、その夜風が今すこし烈しくば……あら光は明また滅、意地わるくも不思議に呼吸の根づよさ。

劣情もこゝに至ッて極まりました。身のまはりいづれも唯茫漠となッて唯、見ぬ目にも鮮なのは窟子の顔、聞かぬ耳にも明きらかなのは太郎の聲——氣はほと〳〵引き入れられるやう。

扨も身の傍には雌浪、大津浪！　今足を奪ッて迷ひの淵に引き入れるか、今身體を浸して煩惱の流に呑み込むか、こゝ窟子のために達不達の境目。さいはひに

齒があるのが頼もしい（齒を切ッて）やう、かよわくも心のあるのが口惜しい（心がさわ立つ）やう、大道を照らす眞如の月、ろれも蠟燭と共に消えさうに爲ッたり、吹き立つたり……

たゞ無言、寂寞、明暗不定、それらがこの場の固有となッたばかり、——ろしてやがて、あゝ劔よりも槍より怖し、羞を含んだためか、すこし眼れたやうないちごの目の上、そして粉がふいたやうな其色艶、しかもその人の身はやゝ横になつてしッ！　衣の婆娑つきが目を呼べばその衣も蟬の羽ごろも——目を眠れッ！　心を掩へッ！「上皮を剝ぎ盡くすのが悟り」——羽ごろもの薄衣を剝げば全くの裸體、裸體の上皮を剝げば既に荔枝の膓めいた血だらけな肉、その肉を毫り落とせば只一組の白けた骸骨——「達人は其原を樂しむ」といふものを。

唯怨めしいのは蠟燭の火、道念がまだ低いとて嘲るのか、人を意地めて慰み顔、力を加へる夜風にたまらず——あら今にも消えさうな！

第八

なぜ！　ひとしく同じ風、ひとしく同じ草木、で、笹はよねいても芋の葉はうな

づかず――やはらかく且あたゝかい天地をわざ〳〵鐵ほどひやゝかに爲るとは。
「この顏でか。」でも玉の杯子底無ひ、別名は强面の太郎。顏――眉の一文字、口の弓形――ろれも文武に通じたしるしを見せるのか、見るに從つて風采はます〳〵加はるやうな――戀と共に。
弓矢八幡、この月末までは元利とりろろへますからと顏までが秋の紅葉、鹿もときに膝をりしき、賴んでろれで斷られてさへ心もちは佳くも無いもの。ましてて――兎に角――言にくいやうな思ひをもし、見せにくい眞似をもし、そして當つてくだけても、扨膿んだともつぶれたともつかず――否なものならとく〳〵と追ひかへしさうなもの、追ひかへさぬところを見れば――さてこれが自惚か。
畜生め、物思はせぶりな、風と言ひあはせて人をもてあそび顏の火影！　赤縅らしい、何のしばらくの時を惜しむ。吹かれたら消えるが潔白――いさぎよく。疲れ顏で片息を吹くのが能か、さて。しかし、なるほど――あゝ「もの言へば……秋の風」、御所方もちとそれにかぶれて居るやう。
たゞ、それさへ無かつなら、たとひ胸に淨機は熱するとも大事無い筈。急にま

ぎらはした振りで燈火に近づきました。
「これは愛でたい器でおりやるよ」。
わづかの氣轉。返事をされなくても物ともれもはず、見るふりをして火を風の方に向けはじめました、風除をば横へ向けながら。
が、氣を付けられました。
「風……あッ……消えまする！」
人よりも火影がたふといのか、今はじめてこの一言。もとよりと言はぬばかり、しかも恨めしさうにいちでは簀子を見つめてそれで笑をふくみました。
偷む機、進まぬ手で火を向け直す、しかしそれは僅の間、われとわが身がをかしいやう、さも器をながめる體で、右と左とへいろ〳〵ひねりまはして居ました。が、今さら無情、あやにくに、賴みきッた風もすこし弱ッたやう、光はつよくふるへもせず……
術計が盡きたのではなくて術計をつくしました。いまさら考へんは、のこりをしいやう、最前は何うにか角にか言葉をまうけて相手の側には近ついた、それで

たゞ火影に心がうつッたため、折角のところを離れて、ろして今はまた燈火に頼みが無くなりました。これと知ッたなら立ちはなれなかッたものを。それが未練ながらどうも口惜しい。

相手の側に近づいて身までくづした、その結果はわづかにしろ、うれまでの苦辛はいかほど。遠くて近い間中、ろして矢張り内心には何處やら極まりわるさと氣味わるさとが有ッて、「滋かろか知らねど柿」、蜜は取りたさ、しかし蜂は否。ろこを忍んで、絶えず——絶えず——すこしも絶えず、疊の目一分づゝ、呼吸一つだけ、膝を進ませて次第々々に近寄つて、可なり矢頃になッて急に大きく取ッてかッたその辛勞、人事なら誰が爲やうか。疊一分。呼吸一つ、それだけ進めるさへ千慮萬考、さとりは爲まいかと危むからには或は蚊に食はれたふりで身をもだえてそして一分すゝみ、咳をするふりで肩を搖ッてそして一分。それが今色も香も無く畫にかいた餅。なまじひの火影、なまじひの夜風、人を……釣りだして冷笑ふ聲ばかり殘したやうな、今となッて舊のとほりの座にはかへられず、また聲も無いのに山彦をつくられず——よし舊の座に立ちかへッたところが、まだ〳〵

先は長いこと。さて何したらと思案に思案、苦勞に苦勞——苦勞、親たちに苦勞をさせる苦勞。迫られゝば鳥はついばみ、獸は食むと荀子だか誰だかは言ッた、そのとほり、路が谷まッては谷を飛ぶ勇氣も出ました、小意地のわるい火影、恨みは唯それ。今ひとたび器を愛でるふりをしてその途端、もし風も來なかッたなら吹き消して仕舞はうと——てもあつぱれ趣向。

その仕度わざと目をば火影にこらしたのがやゞしばらく、で、もう宜い時分、何の意味も無いものを意味ありさうな見せかけ、前こゞみになッて燈火臺をじつと一目——そして一寸かたむけた小首——また立てなほした首——さらに曲げた首——その間始終目をばはなさず、ろして出放題の、他にわからぬやうに呟いたが二言、三言、やがてまた近よりました、燈火に——燈火、これぱかりは近づきにくゝもないッ。

手をさしのべて——しかもそれにすら猶腕の邊まで肉を見せて——やゝ臺を引きよせました。こゝで一呼吸、咳をするふりで吹き消すのは最早勝手。いざ。いざ。あはや今一刻が關で四邊は黑白もわかぬ闇。一吸、呼吸をば吸ひこみました。

これがやはらかく出るのとつよく出るのとが燈火の命の生死の境。誰が輕く……いざつよく吹かう。その咳！

が一思案、わすれて居ましたが、身をかへりみれば窟子とすこし隔つて居ました。今さら迚もの事にと完全を求める心が盛り、折角に出かゝつた咳をさしひかへて更にまた附けくはへの手段を用ゐました。

しとやかに頸をすてし横にし、下から窟子をのぞきこむやうにして、

「何と申す塗でおりやる？」

塗をたづねてもまだ〳〵冷淡、——

「存じませぬよ」。

「さらば是は何形でおりやる？」臺の蒔繪の雁金を見せました。それを持つてそろそろ又も〳〵相手の側まで近よつて、うして身を横にして臺をさしつけました、一左の手で持つて、右の手をば窟子の藤がしらへ持たせて。

「雁金でおぢやる」。

答へは爲ました。が、今まで忍びに忍んで居たこと、唯ならば腕づくでも逐ひ

はらふところ、是も外道が來てわが道念をためすこと丶考へては强ひて煉む氣も起さず、一心心をば靜めて居ました。それにつけいる姫のありさま、觀念、たゞ一心の清淨無垢！　惡魔、外面如苦薩の姿をあらはして人を六窓の猴あつかひ……にくさも憎さ、しかし憎むのは一歩あやまてば愛するとなる、すなはち憎む心を兎に角おてすのは矢張り道心のかよわいしるし、目蓮も慈愛を思つて路に蜂にも蟄され、蔓草にも縛られたとか、それにくらべれば何の血を盛る囊ぐらゐ！　方寸の海、煩惱の雲は湧いたにしろ、煩惱の風さへなければ……

主の心しらぬ舌だけは早く動いて主のために惡魔を叱りのけやうとする、その呼吸、からく幾度もとりとゞめられました。見れば、鐵か、石か、これとも馬……馬鹿か（勿體ない）、まだ膚たゆまず、目まじろかぬ、おのれ、もはや此方の地位は充分、それ「闇は佛を外道に爲る」、惠の安心決定も川の姿には假面をかぶつた始末、今はこの孤燈一つを消して仕舞へ。

嗚呼、この一室の空氣、無殘な獸と聖者とがもろともに吸ッて居ました。霧と共に紫雲がたなびき、鳳凰と共に庭鳥が棲みました。外面の、年たてば朽ちる容

色や血肉をとりのけてたゞその心を圖に、もし現せるなら、現したらさて如何。

「もろともに一味の雨…松は綠、藤は紫」――たとへばこの一間には泥中の蓮花と玉をあざむく露とをあつめてありました。

いざや孤燈！　そればかりが怨み骨に入る敵。猛惡な豺も松明を見ては小兒にも掛からぬ、まして此處獸心の、なまやさしい、嬋娟の妖獸、それが先程から鈴けさうな目を付けた孤燈。あはや命は旦夕。主のために主の夜を守る心づくしもやがては一風――つれなくも光りかよはくて三慾を燒きつくすには足りないのか。今はと覺悟していちごは呼吸を一吸。右の手はます〳〵つよく、しかも柔く相手の膝を押したまゝ。氣の毒、さしとめる氣もつかぬ窟子の聖者。

で、かッぷ！　咳一聲。無…無殘、ても思ひきッた、燈明は消えくさッて？

で、闇？　驚…あら、膝に加はる妖獸の手の生温い――ちッ？　研ッぱちッて仕舞はうか。

第九

今がくるしみの極度、くるしいと思ッた今までが却つて戀ひしくなりました。

さて何うしたら宜からうか。方寸の海、そも〳〵煩惱の風は？

くるしさは双方おなじ、たゞ性質がちがふばかり。一方は防ぐくるしさ、一方は進むくるしさ、「どうして目的をとほさずには…」、「どうして目的をとほさせて…」

「こや明りを」。と呼ばうとした窟子の聲にさきだつて誰やら來る足音？　困りました。誰が。二人とも。一方は瓜田の靴の思はくをうれへるため、一方は目的の達せぬのを氣づかふため。

「誰か」。窟子が。しッ、出さずともと姫は胸一刻み。

思ひはからぬことゝて來た人は返事もせず、やゝ部屋まで來ると、面妖、ろこは眞の闇。

「誰か」。すこし荒くなつた窟子の聲。

では、窟子は其處に居る譯、ならば姫は？　ろして姫も？　これは〳〵。たゞろいて返事も出さず……

「誰か」。窟子がまた一言、そして程經て「こや明…」

「り」と言ひきらぬところ、聞けば婦人の、紛れもないいちごの忍び聲、「し……しづかにッ。明り召さずとも」。

これは爲たり、どうしたまと。平生からさて假面をかぶつて居たのか、窟子。とは知らなくて堅いと思つて……しッ、殿にさしあげる婦人をおのれが〳〵。と思ひとつて仕舞つたのはすなはち今來た人。ろの人は誰。名を聞けばおどろきいる？　義政の昵近塗實左京。

左京は出かゝつた返事を急に食ひとめ、やがて抜足差足、――平常から窟子と懇意な中とて――勝手から何氣なく手燭を借りて來て、部屋で出あひがしら、行きあたッたのは即ち窟子。同時、部屋へさし入る光り、それを送る電火の目光、見れば、さてこそいちごも居る體。

「たッ……太郎どの」。左京が火を籠めて、そして睨みつけて。

さすがに意外、

「これは漆實どのでッ？　ようこそ」。

「ようこそ？　なで、ようこそ。さぞ氣の毒でおぢやッたらう」。そして冷笑。

さてはと窟子は察したものゝ、しかし今の場合益なく言ひとくのも何やら付穂なく、何氣ない體で答へました。

「いかで〳〵。いざ此方へ」。言ッていちごと同じ部屋に案内はしたものゝ、左京は仲々挺子でも動かず、

「御かまひやるな。御むつましいところを妨げる事も無い。このまゝに歸らうぞ」。手燭を下に置き、「この手燭消すとも御心まかせぢや。消しやッたが大事おぢやるまい」。

充分にそれと疑の目星をつけて、鼻であしらひながら冷かしました。

「すこし御待ちやれ。御出でやッたは御用でれぢやらう。さゝはりもおぢやらぬ。すこし、すこし」。

「あ、いや、いちご御の返事聞きにまゐッたのぢや。したが、思ひつきませんなんだよ」。

「何をでおぢやるか？」

「知らぬ顔御爲やるな」。

「何を知らぬ顔で？」

「胸に御尋ねやれ。」

思ひついたやう、更にいちごを呼びかけました。

「いちご御前。てもいつも嬋娟な。したが驚きました、和御前の手の内には。これ、窟子どのと…ならば、この左京も推察いたいたぞや、殿へまゐるのは御嫌でれぢやらう——契りこめた人もおぢやるからには」。

きッと詰めよりました。が、いちごは無言。うつくしい眼をぎろりとさせて唯左京をふりかへッたばかり。

「これ、や、いちご御。東山どのにまゐるは御いやでおぢやらう」。

また無言。武者氣質のあらくれ男、左京はすこし急き込み氣味つといちごの側へすわりました。

「これ、返辭を——人にばかり物言はせて——御言ひやらぬか」。

しかしむづ〳〵動き出す。何か言ひさう。窟子は手に汗。

しどけなく坐りなほして、顏にかゝる後毛を輕くはらひ、おそろしく粘る樣子

の唾液を呑みこんだ樣子。

「和主は誰か。名も名唱らずに人に物言ふ作法がれりやるか？」。

炎處の一鎗、左京もつまる。

「これは〳〵、輕過ぎまひた。御ゆるしやれや。これは漆實左京光厚と申じます る」。

知ッて居ながらそらとぼけ、

「何處もとの方でおりやる？」

ぢれッたい、わかッて居るくせに。とは思ッても最初の一鎗懲りて左京はためく〳〵と、

「東山どの昵近で」。

「昵近衆？」そして淋しく冷笑ひました、「作法を知らぬ昵近衆を東山どのは召しつかはるゝものでれりやるな。」

「ほゝゝゝ」

苦笑する左京をじつと見詰め、

「今何を御言ひやッたか、聞きろこなひまひた。御用でおりやるか？」
「御聞きそこなひ？」
今さら話しの道の順も無く言ッた今までの亂暴な言葉が怨めしくなりました。
あらくれ武者の習として、沐猴の冠、錢漿はつけても、交際には疎く――たゞ胸はでたく、すこし思案して居たものゝにはかに立ちあがりました。
「いや、用はまた申さうぞ。思ひだいた事がおぢやッた。このまゝに歸らうぞ」。
「何として？」 窟子が。
「何として？」 いちでもまた。
さながらの夫婦。で、いちでは何やら心うれしいやう、左京は燃えたつ心、穂にあらはれるのを押しかくした振り、とつかはと歸ッて仕舞ひました。
が、歸ったのが窟子には少し心配の種でした。漆實左京は義政の昵近、無骨ながら性來が正直との事で義政の氣に入り、土民から這ひあがッて一呼吸に錢漿をつける身分となりました（足利時代には武家が大抵錢漿をつけました）。なぜ無骨でいゝかと言へば、紅粉で目を突く中、ちかごろ茶道に凝ッて薄ぎたない茶碗小鉢

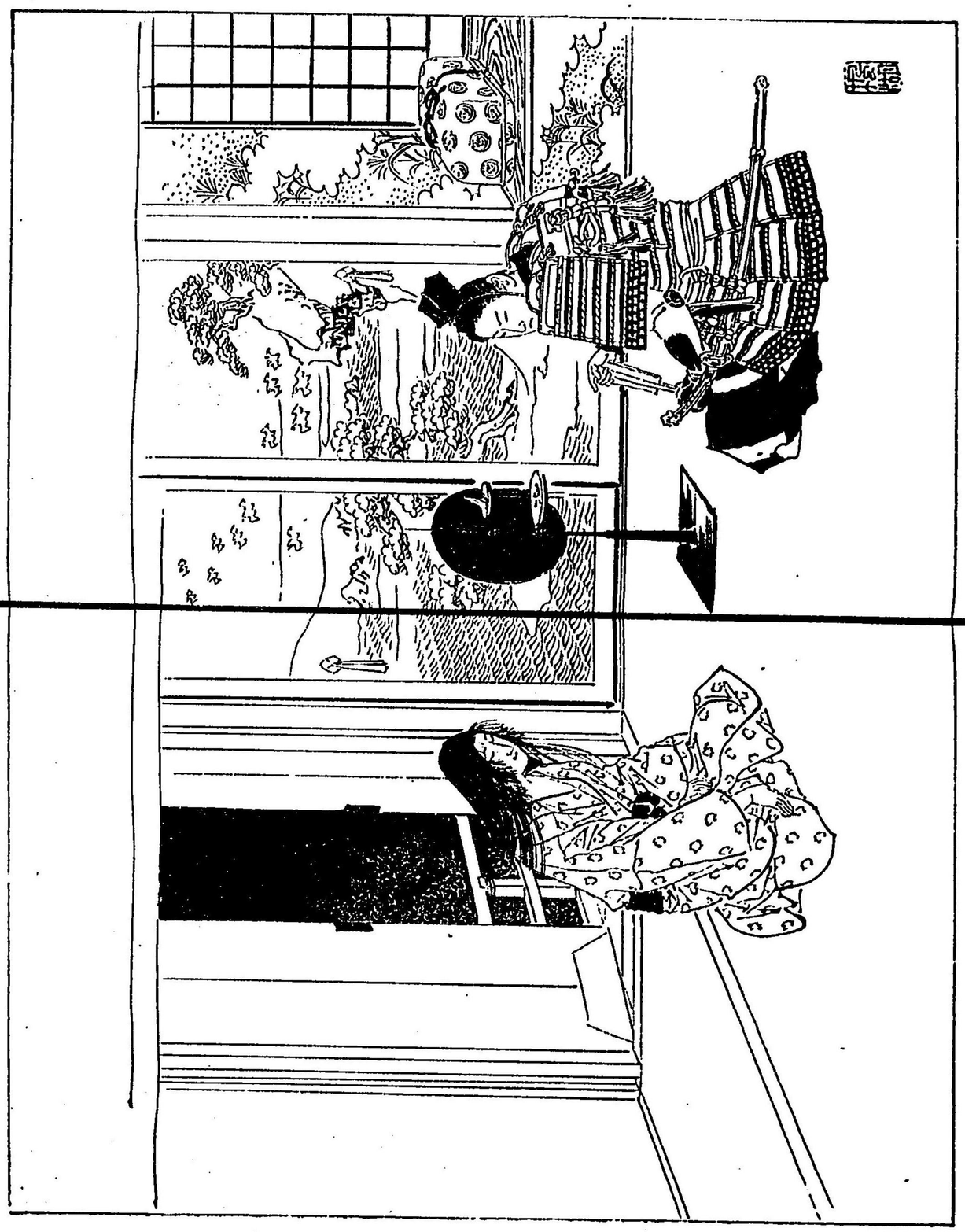
さへ却ッて珍らしい處、そこで素氣無い田舍漢――其顏の赤黑く、骨だらげな工合が堀りだしたまゝの古代の甕に似て居るとて――たゞそれだけでの御扶持。路傍の草も病によッては藥。打物取れる手練は無いかはり左京は漆細工の鑑定には中々立ちてえて居るといふのが氣に入ッた基、盧か誠かとの下馬評は命二つ有るものが爲ろといふ世の中、「いかさま、それでこそ名が漆實」で持ちきッて、近頃肩で風を切るほどの出頭。生來が嫉妬。今までに嫉妬で妻を三人まで逐ひまくり、それが足らずに隣屋敷の事まで口をよく出してあたら温い夫婦中に水をさすなど、金神の精靈見やうと評さへあッた程でした。
ろの人が胸をわるくして歸ッたからには口さがなく殿に言ふは必定。
と人知れず思へばさすがに心よくもなくなりました。左京が臆測の棕櫚箒を鬼に見て告口するからには殿が不興をかもすのは知れたこと、すなはち窟子自分をにくむ、そしてつまるところは勘當か、事に因ッたら刀の齒矢。
もとより身に覺のないこと、赤心は氷と共に清淨潔白、それをあやまッて告口をし、またその誤まッた告口を信じたとてその者どもを疎忽と内心であざわらッ

てさへ居れば何の手もなし、まちがッて無實がわからなかッたらうれまでのことゝ今までは信じても居た、その念をやぶる氣は無いながら、猶多少は當惑の心持。

左京が歸ッた跡にはいちごが流石に手持無沙汰になッて茫然ともして居る體、「おのれが來たばかりで詰らぬ目を…」とろの姿見るにつけ、憎む心はこりずまに現れる、その下直に「あゝ瞋恚」と觀ずれは、さても〳〵心といふものは偏頗な物、入れかはッて出て來るのは「愛」といふ情――いや、むしろ「慾」といふ心。

窟子自分さへ突然いやな左京に肝をひしがれた時には可なり心もざわ立ッた、そこを、如何に利かぬ氣の女とは言へ、たゞろぎもせず、まじ〳〵として居たいちごの風體、恐ろしく度胸のすわつた事と――思ふといふのは即ち感じたので――あの顏でかと見詰め出せば、凡夫さすがに肉の美はまた骨とは格別のやう、殘燈に高低をうつし出す目付や口の邊が見るまゝに怜悧な相をあらはして居ました。

外にもう一つ。窟子自分がしばらく左京に荒肝をぬかれた場合、ろこへ姫百合が風あざけり顏にすねて一刻の夏を殘した、その優美なところ、窟子の究厄をば



一寸――言はゞ――救つてくれたやうな譯。これも、思へば有難いやう。

その有難いやうな人、その怜悧な人は五枚胃の首打つたため千百の加増を賜はる紫紋（足利將軍は白衣紫紋の服を着て居ました）では無くて、紫紋のために側室の難題を言ひかけられた絶世の美人！

渡殿の秋、露にうなだれる芙蓉のかよわい身、で、誰のため、主の威をかぶる弱丸もどきの荒ものに蹴ちらされさうなのを恐れる體も無かつたとは！

窟子どの〳〵と天地億萬の男子の中に唯一人を抜いてくれたその、その、その心根！

が、「これ！」と肩を掴むやうな神禮の鋭い聲も何處となく聞えました。いちごの顏を、見る間、引きつゞいて心に浮かぶのはすこし似た美少年の勢至菩薩、また大聖威怒王の前立のその一人の面影。「あゝ智慧の火で煩惱を燒きつくせ」。悲惨を心に置くのは元々迷、しかしそれに引きかへて愛着をもよほすのもまた迷。おもんみれば心は空、無心が十全の平を得て居るものを、それ、「盈つれば水もてぼれ、盈たなければ瓶もかたむく」とか、前人は經歷を經驗として後世に殘して

あるものを、何の迷を寄せつけやうか。

で、いちごを憎むのもわるいが、また愛さうとも思ふのは惡い、とみづから戒め、みづから叱る。しかしながら、叱る心と叱られる心とは別なものか、こゝに至って人界と禽獸界との區別もなく、而も萬有がすべて尊くもあり、尊くもなし、叱られる心は叱る心を怨みもせずにそれながら叱る心を押しころさうと葬くやうな。「なに惡念をつぶさせやうか」。善心に力付けるのはやはり善心――現の界に彷彿として偈文が神通を得て阿吒の形相をも見せるやう。

ろの内にまたも摺りよって來た――さ、何と言はう――惡魔？　尊者？　いや、ろの美しい陰性の骨と肉との一塊。女性はまたも言葉を開き、

「思の外の事でおりやる。かうなれば兎角詮無し、ぬれぬさきこそ露をも……ねちけ者の左京が東山どのゝ御氣色をさわがせるのは必定、もう御言ひときやる術はれりやるまい」。

氣の毒とも言はず「言ひとく術も無からう」とは何の事。問はれた言葉には何とも答ず、思ひなほして一入言葉をねだやかにし。「もはや夜更、御かへりやれ」。

第十

雨が地を固めていちごは不圖窟子を試す氣になり、はやり切つた煩惱をしばらく自身嫌しました。なぜ窟子ぐらゐなものが義政などの手について、而もいやしい務をして居るか。ろれ是聞きたい事は山々、ろして特に氣に掛かるのは今左京にすつもり、「もし」と一聲は言つて素引いては見るものゝ、又かと言はぬばかり相手は感じもせず、更にろろ〳〵前置のやうな事を持ちだすと次第次第に窟子の樣子は變はつて來ました。

いはゆる地藏の顏も三度、忍べるだけは忍んだつもり、が、今は堪へきれず、何かべちやべちやや言ふいちごの言葉腰を俄に中途から折りました。

「いちご御」。

聲と共にすさまじく爲つた見幕、いちごも流石にぎよつとしました。見れば窟子の色は蒼味がゝつて來て、幾度も唾を呑みこみ、呑みこむ樣子、目がしきりにしばたゝかれて居ました。

「まだ……なぜ……御歸りやらぬ。用がおりやるか？」
さア困つた難問、しかし、思ひきれ！
「用はおりやらぬ」。
おりやらぬ、ぐつと込みあげる肝癪の虫をじり〳〵と押しつけて、それでも言葉の怒りを薄く現したつもり、――
「おりやらぬなら疾く御歸りやれ」。
「今？」
「もとより」。
あゝ決心。いちでの今までの辛苦は灰。聞かうとの是からの望みも空。けれど恍惚娘でもなし……「劍術の極秘は風の柳かな」、あらい風をばかろく受け、
「歸れなら歸りましやう。なれど、もすこし」。
「叶ひませぬッ」。
「すこしも？」
「ちッ！さ、疾く……」

「人ッ」、いちでも些し胸に來ました、「何でおりやる？」
「何が」。
「その言ひざまは！物に程は有るもの、御心得やるか？」
「心得……無禮な人に何の心得が……」
「無禮とは？」柳眉も逆立つ。
「無禮ではおりやらぬか、人を欺いて？」
「欺いたのが無禮でおりやるか和主を思ふて欺いたのが？」
「他言聞く耳持ちませうか。是でも御歸りやらぬなら詮はおりやらぬ」。
「どう詮が？」
「腕づくしでも」。
「腕づくしでも？」
「御歸し申す」。
床に何の咎、手が痛むまで床をぴつしやり、
「さ、御歸りやらぬか？」

仲裁の無い喧嘩、意地にもつのるばかりでした。かう爲ると、いちごは挺子でも動かなくなるのが性質、もはやびくとも爲なくなつて、

「これ、御歸りやらぬか？」

「窟子どの」、極めて平氣な調子に立ちかへり、「腕づくしで御歸しやらうとて女子の一念歸らいと思へば、喃、窟子どの……」

變にすてしく冷笑しました。

「窟子との、な……鎗になつても」。

この美しさは何うだと言はぬばかりの顏付、後毛をわざと戀陶しさうに口へ噛みこんで、そして目一杯に涙をためて。

「鎗になつても歸りませぬ。歸らせうと思しめすなら歸らせる道を御履みやれ」。

「道を履むいはれおぢやらぬ」。

「おりやらぬなら歸る道もおりやらぬ」。

「全く？」

この上は餘儀無いこと、腕づくで抱へださうが、連れださうが此方の勝手、いざと稍心を決した折も折、取次の扈從があわたゞしく馳けて來ました。そして何を言ふかと思へば、あら、天か、命か、この夜更に東山殿が突然臨御になつたと言ふ事。

油をかけて火に炙られる心持ち、左京が告げたゝめか、どうか其處は分からぬ、しかし分からぬだけ胸の苦勞は一入でした。

扈從に聞けば東山殿は先觸も無くて來たとの事。かへりみれば身は小身、一疋の垣守、護衛の時わづかに殿を見る身分、其處へ俄の來臨とは何うしても譯の有ること。

思ひまはせば苦痛は一入、茶山寺のいちごを望むとの殿の命令を窟子に傳へたのは即ち漆實左京、それが辯解も聞かず、歸つて行つて、うして其儘殿に言上したものなら、それこそ大變。

矢を射るほどの間にめぐりめぐつて是等の苦勞が起りました。いちごと云ふ考へは心にのみ殘つて其人は傍に居ながら目にも注まらぬやう。扈從に樣子を尋ね

ました、せわしく、そしてせわしく。

「御先觸無くてぢやな…」「は」。「直に御入御？」「は」。「御伴は？」「漆實どのと外に二三人」。

無殘な！ 直に御入御とあるからには更衣の用意も出來ず、いちごに言葉を交へる事も出來ず――はッし？ その內、既にどやく〳〵いふ人聲。

具足のまゝ出迎へました。出迎へて殿をたしかに見れば見る程氣味わるさは又一倍、わづかに廣い方の書院に案內したのが殿の山。

勝軍の手柄あらために死首にしろ見せられぬのは武士が極うのわるい第一、ろれと遣はなかッたのは此時の窟子の心持でした。恭しく上坐に殿を進めて口誼を述べ、その間わづかに左京の面付に目を配れば果たして察しのとほり餅ならば揚げたばかりと言ふくらゐ熱ッて居る鹽梅、ろして殿はと氣を付ければ寢起と見えて眼は白襲の無紋に髮は亂鬢、常の氣象柄とて深い子細が有りさうにも其顏には見えぬものゝ、兎に角寢起きで、而も小身の家で、しかも先觸も無く、而も忍びで來たとは余程不思議な譯。隨身は殘らずでやうやく五人、左京の外には小坊主

が一人と、帶甲の武士が二人でした。が、いづれも借りた威光に太刀の金物を眼と共に光らせて、廣くも無い肩をわざと猪首に怒らす樣子。一から十まで氣味わるし――たしかに此首最早無い物。

中々に覺悟は定めてすこし頭を低れて、言葉を待てば、やかて左京が膝を進て、

「太郎どの、嘘は申されまい」。

「嘘？ 何といたしての」。

「急度？」

「弓矢八幡」。

「さらば……いちご姫は何う御爲やつた？」

事實左樣なら疑はれはいよ〳〵言譯は出るもの、事實左樣で無くて疑はれてはほとんと言譯をするのも馬鹿々々しく、

「どうと申して」。

「いちご姫とはいつから語らひ初めなされた？」

打つ槌は外れるともての推察ばかりはと果たして思ひてんだに違無い左京の言

葉、聞くだけでも腹は立つ、が、御前と思へば些しひかへて、

「語らひろめたとは？」

「御わかりやらぬか？　それいちご姫と……太郎どの、左京が見たのを御怠れやつたか？」

「わすれませぬ」。

「嘘は申されまい」。

「申さんでもの事」。

「ならば」、殿に御免の目禮をして居丈高になりました、「鼻つまゝれるのも知れぬ間に和主といちご姫とたゝ二人……」

宦子もすこし急き込んで、「たゞそれで然う御言ひやるのでおぢやるか？」

「もとより、何で。思へば左京が脱かりまひた。殿の仰をうけたまはつて見ん事いちごを連れて歸るは太郎どのゝ外あるまいと常から思ふたのは欺かれたので、何の横奪……これ、畏い事とは御思ひやらぬか？」

いづれ此樣な事に爲らうとは思はぬでもなかつた、それで知らず〳〵の中に深い穴にはまつて仕舞つた忌々しさ。が、それとても、思ひまはせば身から出た錆、李下の冠、潔白を知る者を吾自身より外に持たず、たゞ天にまかせて命を待つ心から言へば今更斯う爲つたとて氣にするにも當らぬ事。

辨解を爲やうか知らん。爲たにしろ、辨解の力の利くのは相手の心に辨解を迎へる考か萌した時に限る物。殿は何うにしろ、角にしろ、左京の邪推の熱は今のところ火と燃えたつ、其處へすこしばかりの言譯の差水、何で益に立たうか。言譯は決して益に立たぬ、言ふだけか不見識、と思ひ……さだめるのは又一修業。ろの下から言譯の言葉は理窟といふ假面をかぶつて混みあげても來ました。「言譯ならわるいが、理窟ならいゝ」。「左樣か知らん」。有りの儘を言ふのが理窟で、有りの儘をつくろふのが言譯、しかし、有りの儘を言ふとなれば、多少の心中の汚穢もまた言はなくて爲らぬ物、受けた儘の身體、貰つたまゝの魂、鳩のやうに温和、天女のやうに潔白な小兒、みどり子ならいざ知らず、既に人間を魔道へ陷さうとひしめく七情の奴隷と爲つて居るものが何うして天地に耻ぢぬと言ふところまで有りのまゝに言へやうか。

前人も既にこの位な苦しみには逢つた事、たゞ自分のみで無い、と思へば聊か勇む心も起るやう。

が、おさへても〳〵、こりずまに現れるのはいちごの事、わが心が堅くなければこそ魅込まれもし、試されも爲た事と心で心をすかしても（むしろ）嗤甲斐は有るやうで又無いやうで、ろの花を欺く、ろのやさしい辭の出た、その甘えた言葉の湧いた唇が目先にちらついて、その戯れた、なまめかしい、厚かましい、混合むだ目が至るところに現れて、そして、不思議！たゞ一つの目、一つの唇と考へれば極めて、極めて愛らしいやうで、またいちごの目、いちごの唇と思へば、最も、最もけがらはしいやうで。何が無し、胸の中は出入の混雑、流れこむ眞水もあれば、注ぎでる鹽水もあり、花もあれば芥もあり、風もあれば雨もあり――で殿の顔、左京の面が殊に深く物思はせぶりな目に浸みるばかり。最初から啞のやうに無言の殿、しかし狙を定めたやうにわが顔を見詰めて居る殿、ろしてその見詰める工合が氣の故か、嘲り顔、怒り顔、また嫉み顔を帶びて居るやうな。左京の方、これは言ふにも言はれぬ、何の事は無く、たゞ自分が自分の女房までも奪

られた風、持前の嫉妬は此處から試驗を經るといふばかりの體で後詰が後詰を產んでは、えい〳〵聲して押しだして來るやう。

しかし此儘にぐづ〳〵して居れば終に疑を事實とされて――重い罪。で、追放か、死！　どちらが好いものか、その二つの中では。

追放は長く恥辱を嘗めあぢはふ物で、死は一寸嘗める物。三寸息絶えれば萬事休す、討死した正成より死を吝んだ景清の方が忠義に於ては却つて深い苦勞をしたもの、もし正成が覺悟の上で死んだ事なら。死ぬといふ事は後から考へて、人間の天賦の未練、もつとも傷ましく、惜しく、心の殘る物、で、死ぬ人をも可哀と思ふ、しかし、つら〳〵考へれば死んで仕舞へば理窟の無い話。腑をくゞる時に韓信が相手の少年を斫りすてゝ、そして自分も其處で殺されて仕舞ッたなら、俗人はろれを武士は食はねどもの比喩どほりに褒めるかも知れぬ物の、しかし信の身に取ッては此場合には死ほど樂な事は無かッたもの――死んだ後は漂母に食を乞ふ世話も無くて後の人は自身の追想の哀を直に移して死んだ人にかぶらせ、死んだ人の情をば哀と看做して仕舞ッて、勝手次第に泣いたり、笑ッたりする、そ

れ思へば可笑しいやうな。天の命を受けて天の命の儘に、自然もろとも此世を去る、いはゆる夭折。しかし分を盡くして死んだからには五十七十になッて死んだも同じ事、心は平和にたのしんで、長く永眠の里に眠るのが理。

考へれば自分に分を枉げた事も無ければ、天の命を損ふた事も無い、それで是からもし疑はれて殺されたにしろ、吾に何の痛苦も無い譯、たゞ大本の通情、「死を嫌ふ」との迷が何うしてか洗ひおとされずに殘ッて居るもの丶、夫も刀三寸の走り、紐一分の緊りによッて、目瞬もせぬ間追ひはらはれて仕舞ふもの。廣く「死」と考へれば恐ろしいやうなもの丶、しかし、頁に思ひめぐらせば、死んで息が絶えると言ふ間は眞のわづかの時間、それまでは唯其支度ばかり、たゞ、それ故、刀三寸の走り、紐一分の緊りだけの間。

いつそ追放されるとか、獄に下ッて大赦の命を待つとかで長く恥辱を受けるより、むしろ悟れ！死んだ方が。何も無理に死にたくも無い。赦されるものなら赦されたい――先方にそれだけの明が有ッて。が、赦されぬものなら、それだけの事、死の方がまだまだしも。

物も言はず、口を封せられ、眉は低れて、百尺の松がこ丶に根をさした樣子、折々に左京と殿の方に目をきらめかせるばかり、窟子は正しく座ッたま丶――床も腐れろ。

障へが無いま丶左京の邪推は募るばかり、推察が事實をたしかめて、そして宛もそれを承諾させやうと思ふ體で一言二言言ッては殿を見て居ました。最初から無言の殿、源氏方か平氏方か更に分からぬ風體、が、わが望んだ女を横奪されたのな凡夫として心よくも無いもの、その心を義政がもし持つものとすればたしかに左京に左袒して窟子をば疎んだに違無い譯。が、大抵の人なら第一不審と目を付けるところ、即ち窟子が別に辨解をも言はず、たゞ冷笑顏で左京のあたりをじろ〳〵見て居る樣子、それが義政の心に注まッたか、どうか、胸を映す鏡も無いことゝて……

ところへ、なまじひな、へだての蒸籠がすこし明いて其間からいちごの顏が出ました。一同に目を其方へつけた主從五六人。

よく考へればいちごが此處へ顏を出さうが、出すまいが、胸をすゑた窟子には

何の痛さ痒さも無いこと、しかし、突然…おやいちごが…何故…見た當座暫時は窟子も五寸釘を胸。

見る目は同じでも、見る思はいづれも違ふもの、殿や左京はどんな氣で今襲からあらはれた紅顔を見たものか。

蒸襖から半ば顔を出していちごは一寸、慇懃に禮をしました。で、忍びごゑで窟子を呼びました。「太郎どの」。

さも〳〵打ちとけた體。でも無情な！ 今呼んで呉れずとも――見ぬか、左京や殿の顔色、いよいよ先方の邪推の根は固まつて、肉さへもわな〳〵體。

聞きとれぬ窟子の振にいちごは又いらだつ體、さてそれが貴人の前での禮か、相變はらずのしとけない体で而もする〳〵と書院の中へ入ッて窟子の傍まで――己！ と睨む殿や左京を尻目にかけたま〳〵――さしよりました。

「太郎どのゥ〳〵〳〵」。

笑ふとは何事、情無い。そして、あら錦の袖も美人に取られる運命か、音のするまで引かれました。もはや知らぬふりも出來ぬ、でもなまじひの結ひ、

「何でおぢやる」。故らに改まッて強顔に。

「何で？ 東山どのとは彼方でおりやるか？」

「は」。仕方なく。

見るからが嫉ましく、熱鐵を呑む心持、こらへ…こらへたもの〳〵今早たまらず左京は鯉口に手を――見て扈從の武士もすはと手に唾。

「いッちごッ！ 御前…憚…」

「しッ！」

今はじめて義政が口を開きました。左京を制して、いちごを見て、そして微笑――何か思慮ありさう、

「いちごか、變はらず嬋娟な」。

言はれても爰ぞといちごは極めて輕く禮しました。嬋娟と言はれたのに答へる微笑、そして何喰はぬ顔、――

「無禮いたしました」。

「何が無禮。さて窟子に所用あッてか？」

「是ぞと申す所用もおりやらぬ、たゞ御末につらなりたう思ひまして」。
「末にとは？」意でむかへて聞きとがめました。
「ほゝゝ、御末で御物語を承らう心で……」
言ッて左京の方へ向きなほりました。
「左京どの、先程は。これは如何、なぜ御返辭なさらぬ？」
「何ぢやとは……しッ、また作法の無い」。
「又とは？」馬鹿に手玉に取られました。
「何で」、口をつきだして一際聲を高め、「おりやる」。わざと浸みるやうに嘲ッて。
「窟子どの」、また窟子の方を向き、「御心づかひなされな。妾が何より證でれりやる。喃左京どの、さまゞの御疑ではおりやッたが、ろれには確な證が有ッてゞおりやるか？」
「無くッて！　暗闇でさゝやき居ッたらう」。
「さゝやいたばかりお證でおりやるか、殿にも御聞きの事、さゝやいたばかりでろれと言はれまするか？」
「たはけ！　猛々しい、口さかしう言ふても手に乘らうか！」。
もはやいちでは聞かぬ振、
「御前で斯う申すは畏れも入る事。されど異心でおりやる、異心では如何にもいちでは窟子どのを戀ひしたひました」。
「そッれ」。左京が。
「待て」。殿が。
「慕ひましたが甲斐はおりやらぬ。今宵も人の無い闇で彼是と言ひましたが、露は尾花の心を思はず……」
舌たるいこと、よく言つた物。よもや是程とは今が今まで殿も左京も思はなかッた、ろの矢先常の深窓の姫と思ひこんだ目的が外れて、そして呆れてかへす言葉も出ぬほどでした。
姫はますゝ語りすゝむ。――
「禪とやらを修める人とて御意はまた愛づらしいのでれりやる。迫られて動かぬ

が眞の丈夫、妾も窟子どのをばこよひ始めて丈夫と知りました」。

あまりな言草、義政も口を入れる氣に爲りました。

「さらば窟子の妻となるが望ましいか、東山へ來るは否か？」

こゝぞと言ふ見幕、膝を進る左京を睨める、「東山へ？」いちごが、「東山へも否ではおりやらぬ」。

「さらば窟子を思ひきつて？」

「いえ、窟子どのをも思ひきらずに」。

「二道かけて？」

「二道かけて」。

よし昔は地下にしろ、今は路傍の松も東山殿に向いては寐轉ばぬと言ふ程の權門に對して、あられも無い、かよわい身が傍若無人。何に目的が有つてか、唯義政をもてあそぶばかりか。酌みわけられぬ人心、聞く者どもには更に分からぬ、窟子さへ同じ樣。年も行かぬ十七八の小娘に惑黑の男が散々に嬲られたには違無い、が、ゐれにしても其氣象、常から柔弱とあなどつて居た公卿の中には又めづらしい事。と思ふだけに義政は急に立ちも去りかねゐ、また其儘居るにも居かねるやう、むしろいちごを妾にと言ひだしたのか一寸氣はづかしくも思はれました。

當つて味を見て得意、義政もこの位な人かと窃にいちごがは心をも休めた樣子あまり口數も利かぬ、多少は持前でもあらう、が、五十男が、それでも、見得をするのにちがひは無い、既に見えをするからには、薪が有つて火は點く物、下地が有る上は此方で何う爲やうが…

窟子の風向がやゝ緩くなると同時、むら〳〵と催して來たのは癖ともなつた勤王の心。これが豫ねて聞く義政かと思ひこめば思ひこむほど——あゝ今夜は得難い夜、おのれ、その警固も手薄な。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

第十一

かりそめにも將軍、どんな鋭い人かと思へば案外な、それ程でも無い義政、品評が見くびりに傾けば他との比較は直に立つ譯。

この位の人物、如何に先祖の非道の鎗先の御蔭は有ると云へ、大内の舍人にさ

へ此くらゐの人間は有る事、殿上人と比べても何の其處に甲乙が有らう。無い。で、時世とは言ひながら鴉が雉子の皮をかぶり、大鵬が燕雀と共に棲むとは！

綾か無紋の寢衣、禁裡でゝ——申すも勿體ないが——晴れ着にもしさうな、それを着くさッて腮で家人をも働らかせる尊大偉上、人ッ！たゞ見て居られやうか。

よく考へて見れば自分は今やゝ莟の花の年頃、しかし澆季の世に生まれて冠の身が履ともされ果てた始末、この先き優柔な公卿が何で頼みになる事、元弘の昔に盛りかへしてくれる楠のかをりの跡も無ければ創ッた櫻の匂ひも無い世、うかく と生き永らへて居るのも是ぞと言ッて目的も無さゝうな事。

指を折ッてをさな馴染、共に竹馬にのりあッた諸卿の姫たちの事を思へば、かどわかされて行き方の知れぬのもあり、犬武士に辱かしめられて死んだのもあり——幸に自分ばかりは何處ぞの幸福で今日が今日まで珍らしい運を保ッた物の、もと是人間、ただ是婦人、千年の松も風の無い夜に折れる世の中、齒ぎしりして も鳩は鷹に克てぬ物、いつが親子永別の日となるかも知れぬ身分、のみか、俗人

が喜ぶ浮き世の榮利——自分もやはりそれを好む——その榮利さへ今のところ得られもせぬ、それ思つて見ればあぢきない。

八郎の弓勢をのがれた鶴でも義政の一睨みには落ちるとまで世の阿諛が言ふ殿が今宵にかぎり四五人の伴——で如何に東山は一足の處とは言へ——忍びあるき爲るとは珍らしい事。もし、萬一、その命を狙はうと思つた事なら今夜などは洵に——春が何——この秋の今夜が實、實千金！

あゝ武藝を修めて居たら好かつたものを！

われを愛して望んでくれた處は骨が枯れても有りがたい、公卿の息女を望みくさッた處は七代かはるとも口惜しい、今面會してもわるく高ぶッた——その癖それ程の人物でも無ささうなのに——氣色が恰れられぬほど羅にさはゝ、——それや是や、嗚呼、武藝は心得て置きたかッた。

千里の川は唯その源たけを絶ッただけで涸れ盡くせは爲ぬもの、義政一人をころしただけで足利の政府がそもく 何で轉覆するもの！

が、今の處理よりは情の勝ッたいちごの事、一目見て感じただけの心が厚く分

別を埋ぬて怨みをのみ募らせました。

たとひ義政を無いものにしてその儘足利がつぶれぬにしろ、直に宮方の勢が出ぬにしろ、猶元弘以來歷代の御鬱憤を、いくらか晴らす事も出來る譯、とも思ふ。

義政の側にさしよつて其顏を見ながせば、見惚れて居るといふは僻目か、すてし、さながら獸！ 酒にとろけたやうな顏して居ました。

「まゐらうか？」言ッて又義政を見流しました。

「喃、東山へ。窟子どのをば…思ひ切りました。」

しかし誰か直に信ずるもの、左京がまた口を出し、

「狐！ 鈍い事を。」

「何が狐。何が鈍くて？」

不思議にも太郎をみかへッて思ひ切ッた事を言ひました、——

「垣守と將軍と…ほゝゝゝ…誰にも慾はおぢやる」。

內心をおしかくして居た義政の表向もこの言葉には堪らず頽され、

「まてとか？」

「申さんでも」。

義政と左京とは顏を見合はせました。窟子は唯うつむいたばかり。いちごは更に義政に

「明日とも言はず今宵から直にまゐらうと存じまする。したが折り入ッた願ひがおりやる。申しにくうはおりやるが、一世の思ひ出、御ゆるしやれ鎧着たうおりやる」。

「なに鎧？」一同が。

「鎧が着たうおりやる。生まれてこのかた、婦人のかなしさ、まだ着た事もおりやらぬ程に、今如何に何とて武家方へまゐるのに此素肌では——いかにかねての望み、切めて鎧着てまゐりたうおりやる」。

答へよりは一同ふきだす。

「何御わらひ…無禮な方たち。鎧着たが何をかしうおりやらう。御許しやらぬか？」

「鎧着て」、義政がいかにも機嫌のいゝ體でした。

「歩けやうか、そのかよわい身が」。
「歩けませいで。ある武家に聞きました。緊める處を緊めさへしつらば身のこなしも思ふが儘と」。
「何で左様、望みも有るなら許しもせう。さて鎧はいづく？」
「鎧なんぞは持ちませぬ」。
「持たで……」
「窟子どのゝを借りませうぞ」。

第十二

疊數六枚ほどの小座敷き、八幡の間とも言ふべきかまへ。貧しても武士はたくはべる具足金、まして貧もせぬ身分、横の袴を小楯に飾つてあるのは三領の鎧、すなはちすべて窟子の持ち物でした。
いちごの希代な我儘、殿からも許しが出たので仕方なく窟子はいちごを此間に案内して鎧を貸す事になりました。三領の中一領は親譲りの紺糸威、威し毛のたくましいのみか、胴量も婦人には緩過ぎる處から殘る二領の中の一領、すなはち

窟子が着初めの式に用ひた小形のを貸す事に爲りました。
「是でも召せ」。かさつかせて取り下せば、
「ほゝ微妙……小櫻威し、花小札、重疊でおりやる。太刀と刀は？」
「おぢやる」。
刀櫃から取り出したのは梨子地の細鞘と對の短刀でした。が、いちごが抜いて見やうとしても更に抜けず……
「これ、いかに、抜け……ませぬ」。
「素よりでおぢやる。祝ひ太刀にした物、打ち付けの無刃しでおぢやる」。
「無刃しッ？」氣色をかへて窟子を見ました。
「御あぶなげ無うて却りて怪しうおぢやるまい。短いのも同じ刃無しでおぢやるから鞘ばしる事もおぢやるまいと存ずる」。
恐ろしく失望した体でいちごは刀を兎見角見ひねりまはして居ました。が、何やら付き穂の無い体ことに些したぢろいた風で、
「とても事に窟子との、眞の刃物を御貸しやれ、何、刃があらうとて弄びませ

うかい。大事おりやらぬ。利れ味のよきを御貸しやれ」。
「何で利れ味…何か御研りやる氣？」
「なぜう研つて！　されど飾り太刀では肩幅せまうふりやればぞ。いかで、迚も
の事に」。
「刃無しで無いのは重うおぢやる」。
「重うてもこらへまする」。
しふねく纏はられて終にいなみかねて仕込みの物を貸したものゝ、さていちご
の方は今中々の熱心、抜きはなしてためつ透しつ、燦刃の匂ひに見惚れて居ました。
面白い、奇妙な女と怪しむばかり、肌衣から着はじめて腥當てから拔草摺、胴
もつよく緊めさせて、いざ太刀を佩びるといふ時になり、佩び方だけ悉しく教へ
て着終たつ趣きを言上すると言葉を發して窟子は座敷を出ましたが、さて不思
議、手馴れぬ者が既に佩び終つて其處で待つて居ても窟子は更にふたゝび影も見
せず……

變だ、不思議だに封せられてしばらくは黙然として其場に坐ッて、着ぐるしい
處なぞ直して居る其内に部屋へ人の足音、すはや窟子と思つて屹と見れば、其人
では無くて左京でした。
「窟子どのは？」
問はれても答へずに、
「御濟みやつたか。天晴れ着ぶり！」
「何の」、あどけなく笑つて、更に又、
「窟子どのは？」
「窟子は火急の御用で御所へ今まゐりました。追ひつけ御所で御目にかゝるでお
ぢやらう。もはや御立ち、御着果てやッたら時を移さず…」
「かしこまりました」。
窟子がふたゝび來なかつたのも、それなら當り前、直に左京の尾に附いて出る
と殿は既に近習と共に戸外の薄暗がりに立つて居ました。
豐々しく見送る窟子の郎黨、ろれさへもいよ〳〵肝癪の種でした。が、わづか

に押しかくし、家を出離れてろろ〳〵歩くと、なる程殿は夜目にも見える白綾の寢衣、星ばかり今は輝く闇、しかし從者に前後を取りかこまれて行く体は又一寸立派でもありました。

何處で打ち果たさうか。是からそろ〳〵傍へ寄つて一太刀刺さうか。でも若し仕損じたら……まだまだ多勢に無勢……

にぎりつめていつか我知らず手で送つたらしい鯉口、突然鞘ばしつて、そして、重みに氣が付き、つと取り止めせは、あゝ意地惡、鞘へかへる鍔音が冴えて鳴りました。

「何事ッ！」戰國の習ひとてさすがに從者どもは早く聞き付けました。で、左京はいちでの鍔へ手をやつて見ました。

「あ、是ぢや、この鍔音ぢや」。

「透かし彫でやぢやるか？」從者が。

「遊びの透かし彫りぢや。鳴つた筈ぢや。いちで御、太刀御抜きかけやッたか？」

「いかで妾が大刀を……」是ばかりは流石のいちでの胸もどきつく。

「何故。鞘走りでおぢやつた？」

「なか〳〵。驚いて取りとめまして氣疎い音をさせました。」

「あ、左様。怪我ばし御爲やるな」。

是こそよく言ふ地獄で佛、生死二とあはや覺悟を定めたとまろを、不思議に盲ひくろめられたとはそもそもまだ運の盡きぬ處？

狙はね内には手薄と見えても、さていざとなれば隙も思ふやうには見當たらず、今か今かと待つ内に何か義政はさゝやく體、或はわれを疑ふのかと耳を澄ましても聞き取れず無駄の苦勞をして居る處へ、ても優曇華の花、渡りに舟、左京が斯う言ひました。

「いちで御、殿の仰せでおぢやる。忍び行きもわきて面白いものとて是から殿は和女と只御二人で歩かばやとの覺し召しでおぢやる。淋しくて和女御進みやらぬならば詮無い事ながら……」

「殿御一人と？」

「なか〳〵。われ〳〵近習は一先御先きに御所へ歸れとの仰せゆゑ……」

「たゞ殿御一人と？」

「もとより」。

あゝ天、蟻の思ひも何とやら、たゞ殿一人と！　一人と一人、殊に先方は不意……ても何と言ふ、うまい機會。胸が既にとゞろけば口も利けずさしうつむく、それさへも先方には羞ずたのとも見ゆるやう。で、終に――夢でも無い――挨拶を述べて左京たち近習のものは殿とわかれて本當に、嘘も無い、行ッて仕舞ッたとは！

何とも角とも言はれぬ心持ち、四邊を徐に見回はせば一面の燒け原。誰の陣か、遠篝が殺氣をかゞやして明るく……暗く、比叡れろしは燒け灰を吹き立てて、呼吸も咽ッたい程でした。天地一般ことごとぐ血腥い香りで充ちて居ました。

「いちご、此方に」。低い聲で義政はすこし後れたいちごを呼びました。さし向かひとなると斯うなるものか、聲も宵よりは餘程低く、すこし嫩々しくなッて居ました。

呼ばれる儘に側へ近づいて相離れる事稍、二三尺、しかし又先方は言葉をかけました。

「近う。此方へ」。

で、出した先手き、閊ながら探り中てれば、さて何と無く妙な心持ち！　白綾の手ざはりのよさ、燻きこめた香りのゆかしさ、如何にも將軍は將軍、何處やら身を侵す氣高いところも有るやうでした。

宙で出合ッた手と手――一方は素肌、一方は小手掛け――ろの儘素肌の手は小手がけのを執ッに一息あらく禹と身の側まで引き付けました。あら、腰さへも利かぬ程になりさうないちごの胸の動悸！　引き寄せたばかりか、義政はいちごを鎧のまゝ大抱に脇腹から抱き込みました。で、並んで一途に足をすゝめながら一言すこし聲ふるはせて、

「いちご、抱いたが否か？」

言ッて嚴しく鎧の上から抱き緊める、今は流石のいちごも氣を呑まれて目も殆んど眩んだやう、血ばかり頭へ逆上して前後茫然となりました、たゞ深い息を鼻から爲て。

「かうして」、義政が、「歩くのもまた一入ぢや。人が見つらば何と言はう。都で知らぬ人も無いいちご御と斯うして歩くとは義政も冥加にあまる生まれぢや。はゝ、喃、いちご」。指でいちごの頬を一寸ついて。

あゝ今が時機。惡魔、八樽の慾に潮れて尊の待つのを知らぬこゝを外して又と折りが。寂しさを繋ぐ遠鳴きの痩せ狐、人はるかに陣も遠い、境處、無二の境處。とても此方は婦人、あざむいて刺すのお上策。欺く、今のところ相手は色道の餓鬼、ろの方便で欺むいたなら蔭に一も抜かりは無いとと。と知ッたことならば鎧なぞ着て來なかッた物を、まだ〳〵前の素肌一枚の方がよかッた物を。が、言ッても詮無いこと。しかし、このやうな場合ひに世の一般の女性も斯うか知らん、その人は憎くてその志しは憎くも無い、否、此方さへろの志しには落かされさう。

あつらへ向き、途端に主も無い物見小屋が有りました。まこと此處ころと思へば、義政の耳にわざと直と口を近づけて呟きました。

「御くたびれ、妾はくたびれました。小屋もおりやる」。

「休まうか？」

實上首尾、つれだッて小屋に這入れば腰掛けの椽は埃だらけ、が、氣になる處か、諸共に腰を掛けて互ひに舊のまゝの手をば離さず…

唯互ひに言葉もなくて——身がまへをすれば、いちごは又左で横に義政をしつかり抱く、凡夫の相手、是も好い氣、無理に綿噛みからいちごの胸に手を入れて呟いたのはたゞ一二言、

「胸いたく轟きやいて」。

その轟くのは何のためか、あゝ悟らぬ身の淺はか。足でいちごがそれと無く、男の片足を食ひはさむ、まづ是で足を直に抜いては奔り出せぬ譯。

ろろ〳〵と短刀に手を掛けました。が、近い處とて其手先がもじ〳〵男の左の脇腹に感じました。

「何。其處」。手を取りはなされました。

更に隙を見て、辛く〳〵——暫時！それまでは何うでもしろ——手間どッてすこしづゝ短刀を抜き…抜いて…終に半分は抜いたばかりの實夢現、かれ是して居る内、勢ひ辭む事も出來ず全く身を汚されたならそれこそ殘念、まだ短刀も抜け

切らぬ、はや運命は迫る、もはや一髪も容れぬまでの間、いざやいちご姫、わが身の生死、宮方の興廢はこの一時！

＊　＊　＊

すさまじい物音、小屋も破れるばかり。闇にもそれと透かして見える、刺しろこなッたか、小屋から駈け出した男女二人。最早廣場、白綾は逃げもせず、死に物ぐるひ、斫りかゝる鎧仕立て。一心、隙間も無い、危急の間、男は佩刀をさへ抜かず、

「いちご御」。　聲するどく。

するどく言ッたその聲は？　人思儀、誰か聞き覺えたやうな。

われを忘れて一寸たゝずむ、隙につけいる相手の男、短刀持つ手とねぢ…ねぢ…見る間、取り落とした短刀、音をからりと大地にさせました。

仕損じたか。今は半狂亂。喰ひつく…太刀抜く間も無く。

「こ…これ…いちご御、しばし、しばし、某ぢや」。

だきすくめる男の力、叶はず、其まゝ白綾の顔をすかしても更にわからぬ——

ま、、息せはしくたゞこれだけ、

「何を…義政ッ。しッ！　女子の念…」

「これ、某ぢや、太郎でおぢやる！」

とは又？　おのれ欺くか？

「何で太郎！　見覺えのある無紋の白綾…義政生命は：」

また組み打ち。しかし婦人、氣はあせッても終には叫はず、組み布かれて。もがいても、狂ッても動かはこそ。さて天命、助けを呼んでも始まらぬ事。口惜…歯ぎしりをして泣くばかり——隙もあらば喰ひ付てなりと。

「どうしても」、上の男、「分からぬ。子細がおぢやる。それがしは窟子で…」

「いかで窟子！　窟ッ…窟子は物がたい人！。　わすれもせまい、今が今、ちエッ、人を…人を…人を、おのれ、弄んだのを！

それで窟子か。人畜、義政」。

「道理ぢや、ろの疑ひは。言ひ解かうほどに、心靜めて」。

「靜められうか。もう此身は無ン…無いもの。くッ…殺せ、怨念あらいで！　よ

ッ……しまさ！　殺さぬか！」

あはや上の男の刀を奪ひさう。

「しふねい……」

「執念い、もとより。殺さぬか、かうして又も辱かしめるか！」

「何の辱かしめる……」

「ならば何故ころさぬ、組み伏せて……女子を……ちエッ……殺……さぬなら斯うして」。

首をふりたッてわれとわが腦を大地にあら〳〵しく打ち付ければ、焔け石にあたッて血も多分出た事、捨てゝ置けは死ぬ、兩手を束ねて、動かぬやうに頭をれさへつけれは、足は又足で蹴返さう、押しつけやうでからまるばかり、救ひの人も來ぬ事として更に果てしも有りません。

上の男も工夫に盡きました。白綾の無紋、而も現在窟子の家を立ち出た將軍、それが窟子といふ譯はどう考へても無ささうな事。いちごの怪しむのも更に無理では無い、が、唯上の男は窟子と名乘るのみでした。唯の妄想とも言へぬ、ひしろ一理あるいちごの疑ひ、それ解かうにも月も早無い夜とて仕方も無い仕儀。

「聲に覺えはれぢやらぬか、窟子の聲に」。

「覺ねあッて、似て居たとて作り聲かも知れぬものを」。

「さまで疑はるればそれ迄。誰か嘘言ひませうか」。

「ならば窟子なら何故組み布いた？」

「和御前が哮り狂ふゆゑ？」

「狂はいで。かねての怨みぢや。ろれに小屋での樣を見ろ、窟子の爲業？」

「窟子にはふさはしからぬ爲業ておぢやる。ろれに子細が有ッて……」

「子細と言へば、何でもそれまで。聞く耳を持たぬ！。窟子を慕ふた望みも叶はぬ身、死んでも何が心憂からう」。

何處までも窟子は怨まぬ、しかも益々戀したふ、それを聞く人、上の人がもし眞の窟子なら果たしてどんな心持ち？

唯義政と思ひ浸みたばかりでの半狂亂、それで其上の人が實に窟子であると決まつてわかつた事ならいちごの心持ちはまたどうか？

組み布いたばかりで手は緩められぬ、此儘で居れは夜明けに爲るまて待たなけ

れば爲らず、何か早く言ひ宥めたいと上の男も混雜の間しきりに工夫して居ましたか。意外、洵に是が窟子でした。

第十三

こゝろ付かぬ人には鰻も蛇と見えるとか、窟子が義政と思はれたのも亦一理あッた事、思ひ込んでは骨が舍利でもといふ勢、いちごは益たけるばかり。

「よ……よく靜めて御聞きやれ。これ、足！なでう……傷ばし御貧ひやるな……蹴るなんぞと」……

「蹴りかへせ……ぬか」。目をしわめて猶一心。

「證も見せ申さうず。いちご御、證を」。

「證？」

「しばらく嗜らいで。證にろら言ありつらば……しばらくそれまで」。

證と言はれて、それでもいくらか氣が靜まッた樣子、やゝ耳をかたむけました。

「あかし？見ん事おりやるか？」

「おりやる。申さうず。御しづまりやるか？」

狂ッた乳虎もやうやくに些し靜になッて、組み合ッた手足も中裁なしの物わかれ、が、まだ〳〵油斷はせぬいちご姫、鍔際には片手をかけたまゝ。

しかし思へば夜目、夜も夜、闇の夜、萬一この男がやはり窟子で無く、まことに義政であッたことなら運の盡き。

覺悟は爲果てゝもまた今更のやうで、樣へふたゝび腰をかけても其すわり心は前と大に違ひました。

「御うたがひやるのも道理でおりやるが、何いつはりを申しましやう。まこと某が窟子であるか無きか御いぶかりならば夜邊の事を申さうぞ。夜邊のことあらましは人も知りたれ、節々をば知るものもおりやるまい。まこと某が殿でありつらば此處で和女に鎧着せ申した顛末をば語り得ぬことでおりやらう。したが、語られまする。御心のあるならば申しても大事おりやらぬが、是でもまだ〳〵御疑ひやるか？」

聞けば成る程とも思はれる口條、と思ッて來ればまた其聲も間違ひの無い——あッ窟子か？（むら〳〵と崩して來たのは從前の煩惱心！）

「まことかな？」
「何でいつはり……」
「でそのいはれは？」
猶さすがにいはれを聞いただけ氣丈でした。
「申せば長い事、御聞きやれ。申すからには此身を嘸にくゝも思しめされうが、和女が殿の御命をうがゞひやる心底はそれがしが見付けたのでおぢやる。な、御驚きやるのもことわり、いかゞしてそを見付けたかと言ふに和女が館御着やる時のけしきでおぢやッた、利れ味のよきを望み、刃無しをいなんだ――ろれのみか常々聞けば和女は稀な武家ぎらひてふ事――ろれで怪しと目を付けまひた」。
一々胸にあたる眼力、いちごは只無言。
「それで殿に――武士の身是非もおぢやらぬ――密にそれと告げまゐらせて、猶和女の御心試んため殿の御物を承りて殿めかして早く外に立ち出でまひたも全く薄くらがりに便りを得て和女をあざむきおほせんため。終に御はかられやつた、さゞ口惜しうはおぢやらうが、武士の道、此方は此方の主のある身、御聞き分けやれ」。

さうも巧みに謀ッたのか、その謀られたのは口惜しいものゝ、しかし相手の度量がますゝすさまじく、何やら威にさへも撲たれるやうな心持ち、ほとんと呆れたばかり、
「さう事毎に御見すかしやれは詮無いてと、御身にかゝづらッたが妾のぬかりでおりやッた。誰を怨み申さう。したがこの上、太郎刀禰、この上は妾をどうおしやる？ 繩をかけて義政の手に御さしだしやるでおりやらう」。
「さしだしは爲ますまい」。
「爲ぬ？」
「御ことわり、なれどそれは身に代へて命乞ひしました。それがしが見やぶりた手柄に愛でいちご御を御見ゆるしやるやうとその時申し望んで許されまひた」。
「では妾に咎も無く？」
「おんでも無い事でおぢやる。女性の御身、朝露もやがて立たうず、はやとく――御身にさはるも掛念――今夜はこれとあきらめて此儘に御かへりやれ。寵子を愛

でたまふた御いつくしみは忘れませぬ。煩悩にまよふまいがそれがしのかねての望みで、ろれでつれなうは仕ふまつッた、その贖ひに御身の御身のため、右ひだりあらはにいたいまひた。聞きわけて御かへりやれ。送り申さう」。

情か、仇か、生けみ殺しみのやさしい言葉、何處となく胸にもしみとほッて今更いちごも涙をもよほす、はか〳〵しい返事もなし、あはれ！首だれたまゝの首に物思ひを言はせ、會釋するばかりの體でおづ〳〵、さきに立つ窟子の跡にしたがひました。

今になれば精氣もたわんで、それとひとしく身にこたへるのは鎧の重みでした。窟子の宿を立ち出る時には出陣の女將軍、今小屋から出る時には敗軍の呉姫隊の一人。くろがねの齒を惜し氣もなく喰ひ合はせて肉を殺ぐやうな脛當て、横へそぎれて足の甲の兜めかす草鞋。何故か片腰にのみつるさがるやうな太刀、あるくたび太刀がらみと共に腰骨を咀いて撲つ意地のわるさ。

遠かゞりは宵と數もへらず、あちこちに燃ねさかッて居ました。更けただけに凄味を加へるのは比叡おろし、櫻を散らした昔の春は陣營の一夜の夢、ところ〴〵

にうろつく軍馬はわざ〳〵か人をおどかし好きのやうでした。

それにしても恐ろしいのは窟子の眼力。兎に角一目の最初の鑑定とほりまことにたぐひ稀な丈夫、それと緣が有るやうでまた緣が有るやうでも無い、世の中は小町業平、駿馬痴漢のたとへどほりか。

はじめ床しい人と思ッたのはその人品ばかりではなく、應對の落ち付いて鎌倉ざむらひの角のとれたところ、さらに押れ〴〵づれて迫ッてもますます動じぬためいとゞ思ひは深まさりした、それさへあるにまた人の胸をさとッてそして人を片隅におしつけて仕舞ッた、さて怨んでいゝやら、喜んでいゝやら。そして世の中に緣ほど不思儀な物は無く、緣は緣と形をあらはして始めて緣と知れるもの、現在から既往をかへりみて欲めた言葉、ろうして更に現在からそれを、人自身の妄想煩悩で未來にあてはめて得意顔になるもの、とさだめて考へてもわからぬのは二人の境界。

つら〳〵現在から過去をかへりみれば窟子にわれを憎むところもない、のみか憐れむところもある、憐れむ、それが一轉すれば愛、愛すなはち之を男女にして

夫婦、老幼にして親子、尊卑にして君臣、それだけの情緒はほとんど發動して今にも火を待つ薪もどきとなつて居るところ――あゝ今の場合の窟子は宵にせまつた窟子と違つたか、宵の聖者は俗人となつたか？

ろれにしても、俗人となつたとも思はれぬには猶きつぱり正しく高くかまへて居る樣子。あるひはそれは表向をつくろふだけか？

ならば――あゝどうしやう――今此方から仄めかしたなら、美事此方の思ひのまゝになるか？

しかし、まだ〳〵。思ひかへせば組討ちした處で、もしも窟子が聖者で無かつたものなら、いや殊更に深く精神の束縛を信から受けて居なかつたものなら、いはゆる通を失つた久米の仙人、むかへられた外界を更に內心でむかへてさわぐもの。

極めて言へば至大の至人は至大の放蕩人、俗人がする肉體の放蕩を至大の至人は心でする、その間、迷つた果てを假りに悟りと名つけて俗眼を欺もの。もしも人間に一點も獸慾といふ物が無かつたものならたとひ身に聖者の能をたくはへたにしろ、俗界を解脫して聖者の域には至れぬ譯。事に馴れて遊君は猥褻を言つても恥ぢとせぬ、しかしその恥ぢとせぬだけは猥褻に馴れて猥褻の臭氣に氣が付かぬだけの事、之に氣がついて之を臭氣と觀し、さてその臭氣一點にも染まぬのはつまり臭氣の奧をするどい目でにらめ過ゞした聖者。宇と名づけ、宙と名づけたにしろ、醜美二の標準は外に何が有らう、このこの一點だけ。

觀じ過ぐせば窟子の心のうごかせぬとは直にも知れる事ながら、さて眼前に肉を見て鼻をうごめかす身になつては生まれかゝる道心をも他の心が（〻）消すばかりでした。

歩む毎に一歩は一歩わが家の方へ近づく、その近づくのが何となく殘りをしいやう。朝霧が何！　夜氣が何！　食はれぬものゝ、しかし木犀を眼いで居ればいくらか鼻も承知する――あゝ劣情。

「窟子どの、さぞこの事で出世されるでおりやらう。いちごから運を御得なされた」。

「出世？」意外といふ語氣でした、「何をそれがしが。かねての望みも叶ひまひた。」

「出世が何とは？　さて望みれ遂げやつたとは？」
「殺伐するために腰をもう折らいでも」。
「腰を折らいで？　武士にこゝろざしれりやらぬか？」
「御こゝろばえ、世にありがたい方ゆゑ思はくのみを申さうず。今夜かぎりそれがしは佛門に入る心でおりやる」。
「佛門？　出家？」いちごも意外。
「世の中は夢でおぢやるよ！」

第十四

今までに言ふ場合ひのなかつた窟子の素生、ろの子細は即ち是ぞ。
人界は修羅のちまた、しかし自然は自然のまゝの自然、矢叫びの音はさすがに梅の枝の鳥を醉せず、血色は終に山櫻を染め出し得ず、世のみだれは世の亂れのまゝにして毎と同じやうに一年の都の春も來ました。
「心にかゝる峯のしら雲」、兎に角愛らしいあさぼらけ、蒔絵の書棚に柴舟の慈きをながめただけでは詰らぬ事、いざや是からとの思ひ立ちに俄に近習女どもを召

し俱して義政も櫻狩に志しました。
立ち出た道傍にうづくまつて居た一人の行童打扮の小童裾濃茜の大振り袖に白の奴袴、唐輪の高髷高く結んで、薄草履を足に添はせ、しかる武士にふりもせず、屹と麓下を望んでたゞずんで居ました。
麓下をのぞんで居たその顏が思はす義政の目にもとまつた、と言ふのは外でも無く、めづらしく麗はしい形でした。色は白いといふ方では無いものゝ此方を佶とにらみてんだ眼光のするとさ　あどけ無い八の字を額によせて何かつぶやいても居た體、あつぱれの骨柄と見えたまゝ、しかる從者をさしまねいで思ふ所存を傳へました。
從者は聞き入れたか、入れぬか、たゝ鋭くしかりつけました。
「すされ、わッぱ、すさらぬか？」
「すさる。すさる途をつくしたなら」。おちついて答へました。
「片はら痛い……東山どのを知らぬか？」
「知らぬ。東山どのは物やさしい事が御好きとやらでこめてのみ在すから」。

「下郎が何で御顔を…御名を知らぬかとのことぢや」。
「御名は知つた」。
「知つてなせ無禮する？」
「無禮かとれが？」
「無禮ぢや、御道をさまたげ申して」。
「妨げはせぬ。詮無いぢや」。
「なぜ詮無い？」
「足がいたひわ！」冷笑して義政を尻目に見ました。
「こやつ公卿のわつぱぢやな」。
しかし幼童は耳にも入れぬ體、
「足がいたんで動かれなければ詮無い事ぢや。病ひは處をきらはぬ物ぢや。今はからず足がいたむに此處が、叱られたればとて、退かれうか。くだ〳〵しい！」
「くだ〳〵しい？　何をれのれが…おのれこそ！　立て！　立たぬか、立たねば」。

「待て。どうする？」
「切りすてるわ」。
「切る？　切る？　切る？　切られては足には代へられぬ。切るなら退かうわ」。
おちついて如何にも靜に立ちあがり、冷笑に冷笑を加へて從者と義政とを見てやゝ去らうとした体充分に見込んで從者が「しばし」とまた呼びとめた。が聞かぬふりでした。
「しばし〳〵。」重ねて二三度。
「何ぢや？」
「殿の仰せでおぢやる。しばし」。
「殿が何。また手討ちか？」
「手討ではおぢやらぬ」。
「はゝゝ手討ではおぢやらぬか」。あくまでも膽を見せて此方を向きました。
殿の仰せを承ッて出て幼童に挨拶したのは即ち例の左京でした。
「家人どもの無禮御ゆるしあれ。和主の骨がらを切りに殿がめでゝねらせらる。苦

しからずば御名を…」

「恐悦に存じまする」。きつぱりと改まりました「名は鱗丸と申しまする」。

「いづれのわたりで？」

「禪家でおぢやる」。

「くるしからずば御身の上と御年頃を御聞かせ下され」。

「申しあくる程ではおぢやらぬが、ことし十六歳親も同胞も無い身でおぢやる」。

「そして御身の上は？」

「今申したが身の上でおぢやる。くだくしい事は嘘言申しても同じ事でおぢやる」。

「宮づかへする心はおぢやらぬか、あからさまの申し言ながら。殿にもいたう愛でゝゐらせらるゝ」。

「宮づかへとな？」すてし小首をかたむけて、

「禪家より面白うはおぢやるまいが。何も世の中、して見ても大事おぢやらぬ」。

大抵このくらゐで大方相談が付いて鱗丸は直にゐれから義政にしたがつて東山

へ行つた、ゐれが即ち窟子太郎と改名したので、それから二三年過ぐるあひだ猶義政の方にも思はくが有る事とて、垣守りのいやしい處へ置いてゐの器量をつねに試させて居ました。

これ程に俊秀な少年、ゐれが何故に卒然禪家を跡にして武士になつたかは窟子自身の外に知るものも無かつたのです。

窟子の素生、その機密を明かせば是もやはり眞は宮方の子であつたのです。大内の公卿何某の落とし子、私生といふため表立たされず、終に人にやつた、ゐれからそれへ移り移つて果ては七歳の頃から禪寺の行童と爲りましたが、生れ付いて誰に似たか氣象のするどさ、ゐの身の本心、自身の素生は全く知らぬものゝ、何處やら理義を考へて足利をにくむ心が有りました。そしてゐの心はいつ起つたかと言ふに十二歳頃の夏、途で見た事でした。

誰か知らず、雲紋に蒔ぢらしの古狩り衣を着た一人の公卿が馬士になつて馬を牽いて歩いて居ました。が、その公卿が何か手あやまちをしたとかで二三人の一色組みの雑兵にはげしく打擲され、ゐれで手むかひもせず、頬にまで疵をこしら

べられて大地に泣き臥して居ました。

師僧のうはさで武家の僭上無禮を聞いて居た胸の現も此實際にあたッて始めて活きかへり、深く心に感じをおこしました。

それからは寐ても覺めても、どうした張り合ひか此仕末が目についたやうで忘れられず、更に昔がたりの夜々延喜天暦の過去を知れば知る程武家がいやしくなッて、果ては奇怪な心をさへ起しました。

元々麟丸が武家の不敬をにくゝ思ひ出したのも唯一時の小兒でゝろ、こゝに理非を言ふ程でも無い事でした、が、その小兒でゝろ、それは違ッた目で見てゝろ左樣云ふものゝ、その小兒に於ては小兒心がうたがひも無く大人の大人心でした。で、誰におさへられる事も無く、また紛らす物も丁度無かッた。ろのため終に小兒は小兒でゝろを小兒だけに大きく組み立てゝ、やはりいちごが前にいだいたやうな考へ、すなはち義政を暗殺したらこの天下の不平均は救はれやうと思ひてるやうになりました。

義政の從者と應答した口振りの樣子ではそれ程に迷つたのが亦不思議なやうで

したが、その處一派の偏頗心、すなはち一向の忠と義、大義といふ物のためには流石にさゝい眼もわるく眩まされたやうになりました。

ろれで不圖寺を出たぎり、途に義政にあッて試みて終に伴はれて行きました。伴はれて行ッて中へ入りてみ、樣子を見るにさすがは將軍、いきほひの凄ましさはまた胸にもしみとほりました。元々入り込んだのも折りが有ッたら暗殺でものの血氣に驅られて居たのでした。が、血氣發動した時には岩をもつんざくばかりで、しづまッた時には紙をも切れぬ程になる物、いよ〳〵實際にのぞんで實際いざ手を下さうとなれば、さて何と無く身で身がかへりみられる心持ちもしました。さま〳〵な慾も出て來たり、さま〳〵な躊躇の思案もあらはれたり、そのまゝで彼是日を過ぐす內、慣れた物とて禪書を手にも取る、取ッて深思熟考すれば自分の今までが妄念らしくも見えて馬鹿々々しくも思はれるやうな心持ちもしました。

年が分別の數を添へて心が心を敎へるやうになれば昨日の是はどうしても今日の非で、暗殺なぞゝは何處から思ひ付いたらうと我ながら怪しむばかりになりました。暗殺をしたとても足利がどうもなりもせぬもの、ろして今てゝで足利をつ

ぶしたにしろその跡を美事繼ぐ勢力を宮方が持つのでも無い事、毛を吹いて疵をもとめ、いたづらに世の騒亂を引き起すのも大人君子の爲べき事で無いのみか、事もあらうに、暗殺などゝいふ、身劣此上も無いことに大切の身をなげうッて天の命を不具にするのも何うやら淺ましくも思はれて來ました。

さうなると最う武家が嫌で〳〵堪らなくなりました。土臺自分が塵尾をすてゝ劍戟を取つたのも最初の一念が全く暗殺とか、天下救濟とかいふ處にあッたゝめ、で、ろの最初の目的もつまらぬ事であッたと悟りが付いた上は一刻も殺伐を冒とする、不仁、殘酷、獸心の境に身を置くのが否になッて、今日去らうか明日去らうかと思ッて居ました。

が、其間昨日は伊賀勢が丹波勢と陣屋の据ゑ方で喧嘩をはじめたとか、今日は誰の手が馬を盜まれて混雜したとか、それら數々の紜々が有る、ろの場合ひには折り〳〵當番で鎭撫に出掛ける、ろの度ごといつでも〳〵血を見ぬ事も無い、それがいよ〳〵去りたい〳〵の心を勢付けるばかり、今度出ただけでもう此樣なつまらぬ事をば爲ぬ身になれるか〳〵と思ひ〳〵いつも出て、それで歸ればその都

度々々誰よりも立ちこゑて懇な殿の御褒め狀、さすがに人間の慾をば全くまだ斷ち切れぬところから、つひ褒められゝば褒められたで又いやでも無く、うか〳〵と月日を重ねたのが峯の紅葉も二三度染めかへたぐらゐの永さ、また料らず俗中の俗の使ひ、いちごを妾にとの命をかうむつて出て行つて終に前々回のとほりの始末にもなりました。

今のとまろ窟子には別に慾も得も無く、何をでも機會に暇をとらうとばかり思ひつゞけた處、一頃は殿のにはかの來臨でつまらぬ苦勞を一寸した、ろれが又幸となつて料らずいちごの心を見やぶつて其趣きを殿に知らせ、身がはりになつて充分いちごを歎いた、その一事で言はゞ殿の恩もかへせたやうなもの、この位の處で身を引くのが上策とまづあらましは思ひ付きは付いた物の、しかし今さら事あたらしく暇を乞つた處がとても直すなほに許されぬのは知れた事、無駄な押し問答でまた志しでもひるがへされるやうではと不性が半分喙を容れたため唯いちごをあづかつたまゝでそれから思ふところへ行かうとした、それが實はまた疑ひを受ける原となつたのです。

兎に角それでいちごをつれだつていちごを送つては居ましたが、しかし婦人の事として道は更にはかどらず、はかどらぬと言つて夜更けに婦人を一人で手ばなす譯にも行かず、たゞろれだけ、爰に左京にうたがはれた事も無くは無かつた物のろれより外に仕方はなく、(またいちごを憎くも思はず) 燒け瓦をがらめかして途を拾つて行く内に、あまり面白くも無い事、向ふに方つて松明の影があらはれると思ふ間、此方を指して來る樣子、あれは誰かと思つて眸をこらして居る内に、近づくまゝ數も知れる、總數五人ばかりの一ひれでした。

第十五

きッと目をすえて、先方の群れの持つ松明の火影にすかせば見覺えは更にない武士どもでした。

打扮はいづれも掃き寄せの鎧や大小、或は鎧のわりに刀が麁末、或は脛當てと手甲と更に對せぬ、見たところ野武士とより外は見えませんでした。

が、先方はいちごを透かし見て、直に小腰をかゞめました。

「こや、姫御前では？　れゝ、れぢやッた。いづくを御さまよひやッた事でおぢやる？　奴等は御むかへでおぢやる。」

「むかへ？」　姫がもつとも不審さうに。

「なか〳〵。夕ぐれに御出ましの儘御歸りやらぬとて方々の御なげき一方では——近衞どのゝ青侍どもが斯うおん迎へ承ッてれぢやる。さても〳〵便のいとよき。方々の御なげき思し召さばとく〳〵此儘奴等と……」

世の親ごゝろ、思へば無理も無い事、さても打扮の見やるしく、野武士とまでに見えたもの公卿郎黨であッたためか、二位三位の君さへ衣冠たゞしく着けられもせぬ時世、掃き寄せ打扮もまた尤も。窟子も始めて安心しました。で、ねぎらひの挨拶をも爲ました、

「大儀でおぢやッた、さりとてはそれがしも是から御おくり參らせうとて是まではまゐりました。なれど最早かう御むかへの方々に會ひまゐらせばもう大事おぢやらぬ。」

「なか〳〵仰せでおぢやる。さるから、喃、姫御前、御心しづめて、是より奴輩と……これは如何になせ御答へを……御かへりやるが御否でおぢやるか？」

「窟子どの」、姫は窟子に謀を、「大事無うおりやるか？」

「大事ないやる事でも、御内の御むかへと言ふからには――御歸りやつたが然るべきかと……」

「さらば妾も歸りませう」。

とは言ッたものゝ心細し、

「窟子どの、御身は？」

「それがしでおぢやるか、それがしは是で……」

「是で？……」

「御わかれ申さうかと」。

古い詩にも言ふ、蛾に腕を解く壯士、潔白一點の塵をもゆるさぬ身が見すゞ埃の袋をたづさへて歩くのは氣の進まぬこと、この迎へは今丁度窟子には渡りに船でした。

何か心も進まぬいちご、が、歸らぬとて　別に望みの有るでも無い事、丁度さいはひとは言へぬながら先機會として歸る氣になりました。

「窟子どの、御殘りをしうおりやるが、さらば…さて御身は是からどこもとへ？」

「殿に聞えまほしき事もいさゝかおぢやれば、是より漆實どのまで。夜陰なれば御身を御いとひやッて。」

終に袂をわかちました。今更いちごは火の消えたやうな心持ち。武士につれられて無言で五六丁來た頃、思ひつきました、大事の忘れた事を。それ窟子は最前一言出家になるとか言ッた、それを事に紛れて終に譯を聞き落としました。

あはてゝ振りかへる、しかし無情の夜色、すでに其人の影を呑んで、冥濛とした、殘酷な色を引き亘したばかり、殘りをしさが一層壓しを加へた途端、何！

迎への武士が此言ひ草。

「いちご御、もう身は動かされませぬよ。窟子すら目を抜かれた。」

わからぬ口氣、問ひかへしもせぬいちご。

「いちご窟子、窟子すら目をぬかれた！」

「何を窟子が？」　落ちついてやうやく。

「何をとて、和女まだ知らぬ、心付かぬ？　和女は此儘家へは歸りゝなられぬを。」

「なぜて家に？」
「われ〳〵を眞の迎へと思やるか？」
「眞のむかへで無いてふのか？」
「もとより。いつはりであッた」。
あゝら、僞りの迎へ！　さてどう〻て？　何にしろ、胸は一ぱい。
「いつはり？」とばかり、目が圓くなりました。
「乙女心には嘸おどろきやらう。かれ是言ふにも及ばぬ事。たゞわれ〳〵の行く方に來やれ。靜にして來やらば知らぬ事。さわぎをらば思はくも有る。いちご御！」
あゝ運のわるさ、てもとうして。思ふ事が食ひちがふだけならばまだしも、爲る事ごとに惡い方へのみ傾く破軍の劍先き、刃物は腰に有るものゝきらめかしたところが多勢に無勢。
知らぬ事とて窟子は居ず、分別をめぐらす暇も無い事。
暇も無いと思ふ、思ふだけに氣は迫く、迫けば返辭は途まどひをして……
「否か？　いざ來ませい。」

取る手、直にふりはらふ手。
「何ものぢや、名も名のらいで…無禮な！」
「たは言いはずもあれ！　かう…來ませい。」
猶いちごは從はず。
「筋あきらかならば行かぬでもあるまい。」
「來る？　さらば。」
言ッて名のッた言葉によれは是等は畠山の手につく野武士でした。
「宵の事もれきかれたが最期ぢや。手ではい窟子を欺きかへして今はもう心やすいわ。」
今更仕樣になし、既に前後を取り卷かれて居ると、鳥の翼でもなければ知らぬと、で無けれはこの圍みをぬける術が――無い、といふだけでは澄まされぬ一期の究厄、が、究厄とおめ〳〵考へるのみでした。
とても此儘では逃げられぬ、せめて一寸も延びたらば些しは便宜も。刀の刃糞になるために否と答へるもの氣の無い話し、まづ心を落ち付けろ。

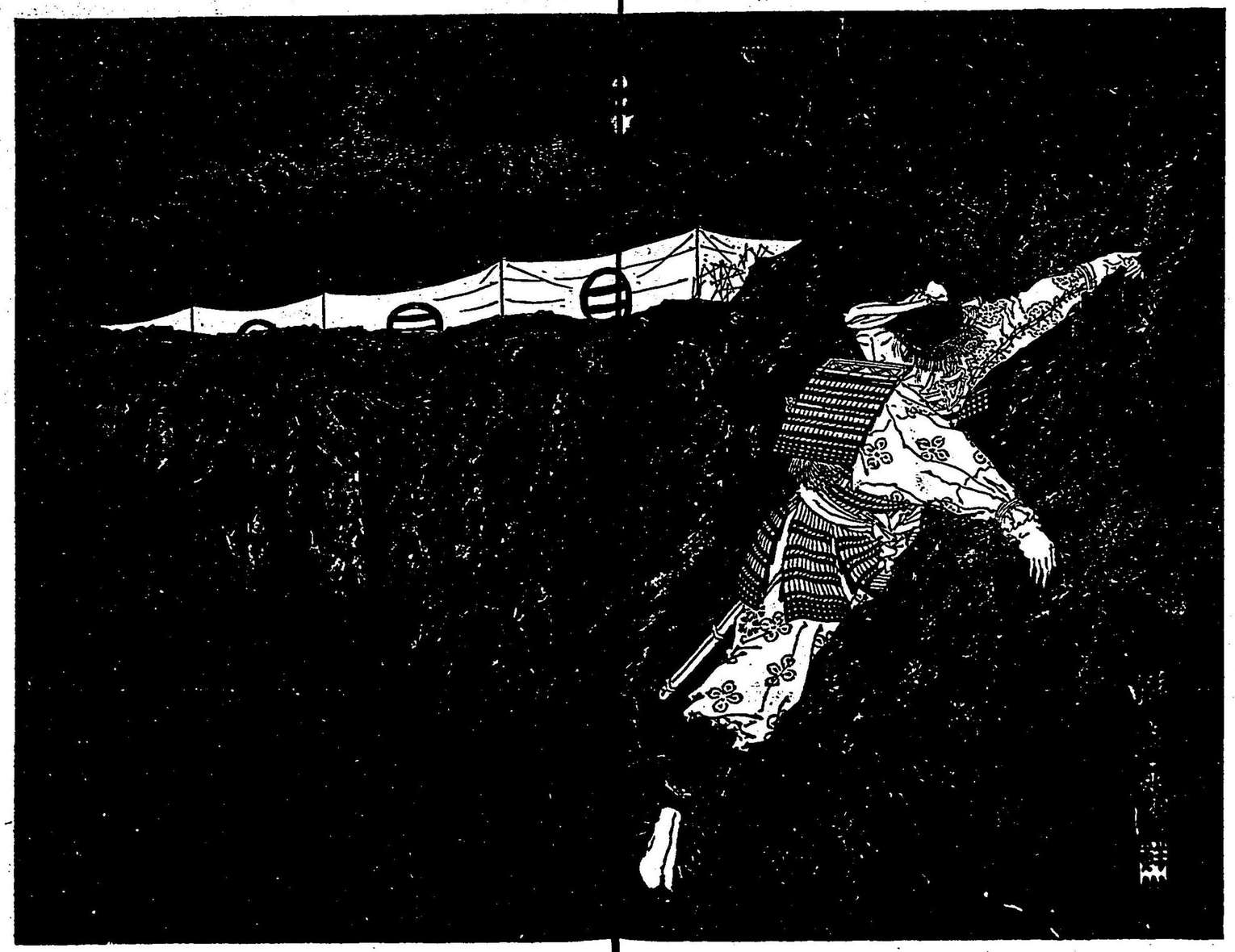
終におめ〳〵引かれて行く、その行く先きに見える小高い砦、其處が、聞けば畠山の持ち場の一つとか、割りに籌も少い樣子。

既に夜更け、荒れ野の物凄い景色は今が盛りと言ふやうな有り樣。

で、餘計な、差し出口の思案のみ首を擡げて肝要の工夫は尻でみをまて更に顏をも見せず――おくる一歩、その一歩がそゝろに惜しいやう。燒け瓦、人は嫌ふ燒け瓦。しかし自分には懷かしいやう。せめて躊躇の時刻を延ばすため。遠里の陣々の篝、人は好まぬ殺氣の色。が、自分には賴もしいやう、あれは誰の陣、ゐれは誰の麾下と一々に問ひたづねてわづかに時刻を移せるため。

しかし、肝要の工夫はその都度またゐれら餘計な辛苦に逐ひまくられて一溜まりも無く首を縮めて仕舞ふ、と思ひ付くだけ胸やるしさは苦勞の爪にかきむしられる、失望と恨みとを混せた溜め息が一つ二つ出る頃は既に陣屋の入り口に來ました。

砦は、よく見れば燒け灰の上にかまへた物。打ちかためたのか、土臺さへしつかりと石で組んでありました。裾から頂上までは一町足らず……



落ち付いたつもりで、

「こないに高いもの築いたのでおりやるかっ」

「なか〳〵。此方は搦め手で、大手は彼方でおぢやる。搦め手で、昇りにくうもれぢやらぬが、大手はいたい難處でおぢやる。」

「難處とは？」

「切り岸で……谷の深さはいかほど有らうか、人馬も行通はれませぬ。此間の戰ひの時、山名組みの誰やらか土取つた跡でおぢやる。」

ほとんど耳には止まらぬ應答。うれを耳へ接けさせながらつひに隙をも得ず一室の内へ押し込められました。

押し込めて何うしたことか、武士は戸を閉てたまゝやゝしばらく經ても出て來ませんでした。

部屋には一點の光りも無く、ことさら勝手も知らぬ事、更にどのやうな造りとも知れず、さて暗ながら手で探り〳〵樣子を撫まはして見ました。大兵ならば三人とは入らぬくらゐの狹さ、閉ぢた戸にろつと手をかけて明けやうとしたもの丶、

支へをかけられたか、更にうごかぬ體。

片方にある一つの窓、そこには幸ひ戸も何も無い儘、顔だけ出して下をながめて吃驚、如何にも此處は大手に近い方の些際と見えて、見下すかぎり果ても知れぬ谷、殊には暗まぎれ、凄まじさは一入。

せめて此方が谷で無かつた事なら逃げ出す便宜も有る事、しかし底の樣子も知れぬ處へさて如何に大膽でも――下りる事が出來なければ監禁された儘籠の鳥となり果てるばかり。

それにしろ、武士が自分を部屋へ閉ぢ籠めた儘なぜ出て行つたか、察するに、やがて今にもまたふたたび歸つて來る事、その時には何と言ふだらうか。

われながら自分をばつねく大膽と考へた、それも今思へは全くつまらぬ空想でした。我ながら自分をは平生利發とみとめた、それも今氣がつけは殆と迷ひでした。いかに何とて欺かれて、そして阿容々々として――その間に逃げる猶豫も事によつたら有つたらしいに、終に、ちつ！　轍の魚となりはてたとは！

ながめれば過去はやさしく、將來は六かしく見える物、過去の合戰ばなし、自

分がろの時に居たら天晴れ大將の首をは人の刀にわたさなかつた物をと腕は取りしばつてもさて未來の同し塲合ひに對すれは其金鐵の腕も精氣既にどこやら、今さら過去をかんがへれば、慾目！　無ささうな處にまた逃げる手段も有つたらしい、むしろ最初あざむかれぬやう氣もついたらしい。

いちごは快活に育ちました。言はゞむしろ變はつた快活の生活をして來ました。腑の緒切ッてからこゝに十六七年、その間憂苦――一身の望まぬ憂苦――をば雲丹の中の實ほども味はつた事の無かつた身、今こゝで始めて征途のくるしみを知りました。澆季の世の中、しかし自分の剛い心、言ひかへれば其奇を好む情から世の中の支へを突きやぶッて世界の障碍をば物ともしなかッた、その權力は今既に無くなりました。親にもいちごは屈しなかッたしかし、ろれはいちごを愛する情の親にも有ッたので親もいちごを强く屈さなかッたのでした。義政にもいちごは節も折らなかッたしかし、それは義政が蜜を望んで蜜蜂をやしなッたためでした。その當座はそれとも心付かず、僥倖を天福と看做して徒に思ひ上がッた身が身で淺ましいやう、聞けば些の松をわたる風さへあざけり顔でした。

いづくにも例は有る事、いちごの幼友だちに何某といふ姫もあッた、その人は和歌に堪能の名が宮庭に名高く上々の筵にも歌合はせの時には必らず出るほどの勢ひ、それがため終に氣を高くしすぎて、出過ぎた歌をさへ作り、誰にか難をさへ入れられた事の有ッたのは眼前自分が見て居た事、それを可笑しいと冷笑した心の有ッた身が何うして是程に思ひあがッたのか知らん。

屈せられぬのが眞の哲人、今自分はこゝ屈せられました。今までに屈せられなッた非凡の量が實際有るものならどうして今この場合ひをも抜けられずに居るものか。脱けられる。が、自分には脱ける「ヌ」の字も叶はぬ始末。

平生の意見も全くは死なず、いよ〳〵婦人は男子に劣るとの思ひをば深くしました。で、物ぐさい氣が前に注意を呼ぶのを怠ッて、がッかり主人を究厄に落とした、その氣、ろれを養ッたのを誰かと問へば拗天をも人をも怨まれぬ事。

今が今までは世界に類は無ささうに思はれた、險奇な幸福の巣にぬくめられた自分の身、が。今は自身で自身を評する處、とても世の女性には及びも付かぬ不幸の身。なぜ？ みづから究厄の種をおろしてそれを高慢の雨で養ひました！

男子が婦人をかどわかす目的は何？ その答へは言ふにも及ばぬ事、やがて辱かしめを受けるに決ッて居る事。辱かしめ、この倫理混亂の世の中にさほど人の後指は恐ろしく無いものゝ、虫の好かぬ者の處に居るのは如何にも殘念！ それを知るか、知らぬか、いづれにしろ、さぞ兩親も姫の居ぬに苦勞は爲て居る事、今の禍に出遇ッて感じやすい、乙女心もさすがに催して來ました。

ろれにしても野武士と迎への者ぐらゐは窟子にも見わけは付きさうな物、或は子がろれと知りながら自分を究厄におとしたかとのも思はれる。

それや是や物思ひは珍らしくこゝにいちごを蝕ひました。秩序をも立てず物思ひがあれまはる間、出沒するのは逃げる手段の工夫ばかりでした。

まだ〳〵武士がこゝに閉ぢこめたばかりで出て行ッたのが仕合はせ、今逃げなければ――あゝ、胸、胸がさわぐ。

どうしても窓より外には便宜も無い。でも、また外にも有るか。探うまはす手先きに障ッたのは、あら塲處は部屋の片隅、何でも人間！

部屋は眞暗、しかしそれと氣が付けば總毛立つ、もしくは死人では　見ねも

せぬ目を見張ッて闇をながめて儘に手を出してさぐると、發矢！死人でも無ささう、慄へる樣子。で、うの者の聲がかすかに洩れました、――

「も……もう……御ゆるし……」

聞きさだめれば婦人でした！　いちごは再び疎としました。

「御ゆるし……情ッ！」

何と思ひちがへて哀れを乞ふのか。

「何ぢや。」

「御ゆるし……」　引きずるやうな聲。

「其方は何ぢや。怪性めいた――女子か、男子？」。先方の弱味にすこし此方に勇氣も付いて。

「御知りやらぬ？」

不思議、また向ふから問ひかけたとは！　何で此方に知る譯が……

「知らぬ、何ぢや？」。

「つ……」

「何」。

「つ……辻君でおりやる」。

第十六

熊を逐ッて兎に出られた心持ち、辻君と聞いて又ふたゝび驚きは加はりました。が、同時に心も少しは靜まりました。不圖思ひついたのは是から何か便りになる事を聞かうとの考へでした。

「れれは荒びする者でも無い。したが、和女はいつ此處へは來た？」　力めて男子の聲をよそほッて。

「昨夜からでおりやる」。

「つばらに今までを語りやれ、力にもならうほどに、喃、つゝまず。おれは此の手の頭人ぢや。かゝるべしとは露知らなんだ。待ひどもの荒びにも術は盡く、かう女性を取りこめて。喃、つゝまず語りやれ」。

けれど女はよわッた体、――

「恥かしながら聞こしめせ。昨夜、思へば妾の身から出た事、さる武家にたより申したが事のおこり、伴はれて此處へは參つた程に、聞こしめせ……」

「こや、なにを啼く？」

「聞こしめせ、これ、御情、そう身は利きませぬよ、身は。」

「身が利かぬ？　いかにして？」。

「御料りやれ、くッ……口では申せませぬ。」で、泣くばかり。

「泣いちや知れぬ。泣かずに……さて？」

「夜は陣の警固とてこゝに妾を閉ぢこめたのみでおぢやッたが、さて蓋に爲れば許多の〳〵あらくれ男が……」

またいちでも舌を捲きました。相手の言葉によッて考へれば、如何にも夜それら武士どもが來ぬのも譯のわかつた事。しかし、もし蓋になッたことならば？

どうして自分も逃げ出さずに居られやうか。

「女子、うなた何故逃げぬ？」

「逃げられましやうか、切り岸御見やれ。」

「外に道は？」

「なぜて外に。」

「切り岸は高いか？」

「御知りやらぬか？」

疑はれる筈、頭人と云ッた上は。

「あ、いや、その頃土を運んだとやら言ッたを聞いたれば。」

相手は摺り寄ッて來ました。

「喃、御情、頭人と仰せられるので御願ひまゐらすを――聞こしめして、喃、助けてたべ。」涙にかきくれて、そして　れた聲をかみしめて。

「哀れぢや。許してもやらう。しかし、うなた何處のものぢや、名は？」

「それぱかりは。」

「言ふたとて我かぎり人には洩らさぬを、大事あるまい。」

「御ゆるしやる事ならば、恥かしき事も、さらば打ち明けまゐらせう。ゆめ、人には。」

「れんでも無い。」
「わらはは内裏がたの……」
いちごも胸にぎッくり。
「……の誰ぢや？」
「小君と申しまする！」
あらてれが？
「式部どのゝ？」と口までは出ても、思ひ直して辛く言葉を食ひとめました。胸はたゝあぐられるやう、聞く身もふるへ出しました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

第十七

小君が辻にたゝずむと言ふ事は此頃の噂ればなしの時聞いたものゝ、しかし爰で運命を共にしやうとは思ひがけませんでした。驚きは比へる物も無いほど、小君の身の有りさまを且つ見且つ考へれば恐ろしさ、凄さ、また氣味わるさ。
何の、自身さへ逃げ去る手段をも得ずに居る事、小君までを助け出せやうか。

助け出してやると言ッたのは元々いつはり、しかし相手は見ず知らずでも無い、竹馬にのりあッた幼なじみと分かッたからには、真心！　あざむいたのが氣の毒でも有り。
と言ッて打ち明けていちご自身の名をつげる事も出來ず、今の處、よし逃げるにしろ、方便をつけて一人で出るより外仕方の無いこと。
夜は武士は來ぬとか、まづそれだけは安心。しかし、冷かにきらめく星の光りを半ば失望の色を帶びた目で見上げれば、傾いて既に丑をば過ぎた體、あかつきにもやがて間の無い事。
夜さへ明ければ身は飢ゑた鷹の餌になる仕義、それまでが運の定めどころ、しかし千仞の切り岸、どうしたら飛び下りられやう。
飛び下りたにしろ、いや、這ひ下りたにしろ、下の底の案内はさらに知らぬ、下はろ〳〵泥か、水か。水？　身丈は立たぬか。泥？　掛け引き不便。それとも石床？　ならば、下りる時足をあやまてば五體はたちまち粉微塵。
まづ切り岸から逃げる外に手段は無い事、で、這ひ下りるより外に工夫も無い

事、這ひ下りるとしてさア、鎧のまゝがいゝか、ろれとも脱いだ方が？

言はずとも知れた、素肌が何より。鎧下に大小ぐらゐが究竟かも知れず、しかし、また思ひ直せば其處此處の草には身體に疵をもつけられる事、肉へ肌のやはらかな肉へ。監禁される事を思へば何でも無いものゝ、猶一つの不便といふのは鎧下は白、闇とは言へ、人の目、まして鵜の目鷹の目の武士の中をぬける事、見咎められ易いは必定……でも甲斐の無い始末。すこしぐらゐは不便でも、一般に行はれる身の固め、着た方がよいかも知れぬ。

どうしても着た方がよい。が、大刀は邪魔にならう。と言ッて捨てる譯には行かぬ、繪卷き物に大刀を脊負ッた圖のあるのは大方この場合ひ、後ろへまはして脊負ッたがよからう。

窓へ手はかゝりましたが、さすが氣にかゝるのは小君の事でした。ふりかへる氣はひ、見とめ得たか、しわがれた聲、――

「いづくへ御出で？」

はッと胸へは來ましたが拔からぬ顔、――

「今」、しかし心は上下顛倒、「助けうずる、そのため。しづかに〳〵。」

聞くや否や泣き臥す體、うれしさに。氣の毒さは骨身をもくだくやう、さすがに此方も催ず涙、窓にかけた手は弛みました。

が、女々しくては――思ひ切れ！　口のうちであやまッて、そして、窓へやゝ昇りかけると、目はくら〳〵。

弓矢八幡、あらゆる天地八方の神々、今日ばかりは擁護々々！

窓の手をはなせば砦の礎、からく下り立つてさて下を見れば、あゝ〳〵谷は呑まうと腮を張る。

岸の向ふには誰の陣か、籐に透かせる紋處は丸に二の字の即ち足利、此方とのへだたりは二町足らず、――どうぞ見咎められぬやうに。

幸に畠山の手のものは此處にまだ影も無い、もしぐづ〳〵して夜まはりに遇ッたら一大事、早く早くすこしも早く――さア降りる、いきるか、死ぬかの境に。

皇天后土、特別の擁護！

なる程切り岸、しかも燒けた石や灰の山、かたまッたやうでも流石に些し〳〵

づゝは崩れにくづれて足元の危險は比へやうも無い程……一歩を下して踏み試みては片手をはなし、幸くも五六間は下りたと思ふ頃、耳を貫く聲が上にしました何かのゝしり噪ぐ體、しばらく足を休めて聞けば果たして察しのとほり、紫の武士の諸聲で、見れば松明をかざして切り岸の下をのぞきこみました。

「すは…彼處に…逃げた。」

たしかに聞こえた上のこの聲、さア何うしたら。と思ふや否や思はず手は——石にかけた手ははなれました。離れて、同時、足も、しッ！ 烟りを立てゝ辷り落ちました。

＊　＊　＊　＊　＊

露に心づいて目を覺まして、扨わかッたのは自身が眠ッて居た事でした、氣を喪ッて居た事でした。既に夜は白々曙、で、身をかへりみれば切り岸の大石に支へられた處を、上からくづれて來る蔓け灰におほひかゝられて全く埋められて居ました。鎧着た甲斐も有りました、怪我もせず。

はるかに上を見上れば砦の礎がすこし見えるばかり、向ふ岸の陣で嘶く馬の聲

が朝風に駕して聞えました。

今の内逃げなければこの先き夜まではまた間の有る事です。が、曉方は人馬の行き來も繁くなること、却ッて或はみとがめられるか知れぬ、しかしどうも又おめ〳〵として靜にして居る譯には行かぬてと、何も運さだめ、進み出して死ぬならまたその方が望ましい。

危急に遇ひ馴れて決斷もすみやかになりました。いざとばかり、身をよくも繕ろはず、更に下へ〳〵と降り果てゝ見ると、膝だけの水が有るのみでした。之に力を得て力めて人の目にかゝらぬやう、心を盡くして歩いた甲斐も有ッて、やがて只有る廣場に出ました。

道端には千切れた鎧の袖なども散ッて居て、また人の足などさへ飛び散ッて居ました。まだ武士には一人も遇はぬ、まづ幸と喜ぶ間もなく、向ふから來る人影、また武士かと——しかし隱れる處も無いまゝ——おづ〳〵近寄ッてよく見れば正に是は一人の僧でした。

笠が深くて顔も更にわからぬ、しかし僧とあれば心配にも爲らぬ。むしろ之に

身の保護を頼んだ方がよからうかと思ひつきました。

僧を見れば猶豫なく窟子の言葉も思ひ出されました。さう思ふ所爲か、僧の樣子、顏は更にわからぬ物の、窟子に似たところも有るやうでした。

「物申さう」。行き過ぎたのを呼びとゞめて。

僧は立ちどまる、いちごは傍へちかづく。

「さしせまッた願ひながら今敵に追はるゝ身のうへ、出家と見てたのみ參らす、いかで連れ立たせて助けてたべ。」

僧はいちごをつく〳〵見る樣子、で、譯も無くうなづきました。

「いづくへお行きやる？」

「內裏へ歸らう心で。れくりて給はらば此上なき幸でおりやる。」

「やすい事でおぢやる。」

はからず爰に助けを得た嬉しさ、當てにならぬやうな物の、しかし地獄で佛のたとへ、千百の護衞を得た氣になりました。のみか、運よく敵も追はぬ體、それから一群れ、二群れ、道で他の武士どもには遇ッたものゝ、いづれも此方をじろ

〳〵見るばかり、咎めもせず、ことさらいちごは道に落ちて居た破れ兜をひろッて顏をさへ深く匿したこと、つゆ程も終にあやしまれんでした。

が、氣になるのは僧の樣子でした。手甲から洩れて見える手の工合、わづかに差しのぞく目にとまッた腮の樣子、充分に若い男には違ひなく、十が九までは窟子かとも思はれました。窟子なら言葉をかけるかも知れぬ、うれが左樣でも無いまゝ、或はとの疑ひも出るものゝ、しかし賴んで直に承諾したところを見れば何となく怪しいやうでした。こちへかねて宗門はと素引いて見ると、禪の趣きをこたへました

第十八

すでに宗門を禪と云ふからには十の七八まではこの沙門は窟子らしい、うれにしても身のなりがかう早くもかはるものか知らん。

鼠の袴の常着に輪袈裟をかけ、編み笠を深くして居ました。さしのぞいても顏はよくも見えぬ、まして出家に對して俗人が笠の中を機關か何ぞのやうに差し覗くのも無禮のいたりゆゑ、辛く辛して偷み目でわづかに心をすかさせて斯うかあ

ゝかと思ひ惑ひました。

姿と言ひ、聲がらと云ひどうしても窟子でした。問ひかけても容易に口を利かぬ無口もまたそれと同じでした。てどに推察を固めたのは其出家が小太刀も懷中にして居た事です。

仕込みなら仕込みとして刀物をば持つのが出家沙門の作法。それを、如何に戰亂の世とは言へ、たゞ腰には佩びぬとの言ひ譯だけ、鞘がしらを些し懷中からあらはして利器を携へて居た工合ひ。どうしても武家あがりの出家でした。

が、ろれにしては又仕度の早さ。しかも連れ立つて歩いたのは昨夜の真夜中過ぎ、それから、如何に窟子が非凡の人であつたにしろ、殿へ詐しを願つてさて身をやつして出るのに一日とかゝらぬといふ事も無い譯それとも前からあらかじめ仕度をして置たのか。まさかそれ程でも。

「いづれへ御わたりの御心でおりやるゝ」せめて行く先きでも聞いたらばとの思案。

「まだ行く先きは定まりませぬ」。

「つねに行脚御しやるか？」

「なか〳〵」。

「いづれの御うまれでおりやつた？　御名はゝ」

「名とは俗名でれぢやるか？」

「俗名でおりやる。」

「俗名御聞きやる譯はおぢやるまい。」

木に竹、あぶら氣の少い挨拶は元より隠れもせぬ窟子の固有たゞし取つく處も無くなつたもどかしさは前よりも一入、で、うか〳〵と道を拾つて居る内にいつか我家ちかくまで來ました。ろれ迄に問ひたださなくては――あゝ、しかし其手段は皆無。終に否でも應でも片はつく。

「最早内裏。それがしは此處で」。

言つてわかちろうにした袂を引きとゞめて。

「恭なう――なれを、上人。てゝろよく救ひたまふた嬉しさを何にたとへましやう。あはれ、しばらく、行く先を定めぬと仰せらるゝからは、喃、妾の家にてよ

ひ一夜」。

僧はいつかな聞き入れぬ。聞き入れぬところを見ればいよ〳〵窟子にちがひは無ささう。ろのつれなさの怨めしい！　何の、左樣うとますとも。まゝよ、婦人の一念、引きとめる手をふり拂ッて後をも見ずに行くろの跡を追はうか知らん。

折角家ちかくまで歸ッて來て、それで顏をも見せずに又も兩親に苦勞を重ねさせる事か、もし是で出家の跡を追ッて行けば。昨夜居なくなッてから嘸や嘸、あゝ老の友とたのしみにして下さッた親を暫時なりともくるしめる身の不孝。われながら不孝とは知る、不孝は子の道で無いとも知る。しかし今こゝでこの出家を取りがしたなら、相手は雲水の身、跡で山の端の霞をながめて昨日の雲の名殘りと思ふのも鈍ましい。目的は自身でも自身がいやしく思はれる劣情、が、劣情！自身がむしろ自身をいやしまずに、たゞ劣情といやしんだものならいゝものを。

荒れ野十里、見わたす果には山が限り、朝日影を背負ッて行く出家の後かげもやうやく……やうやく……やうやく繼く――なッたと言ッたばかりで見て居られやうか。

二三歩ふみだして又一思案、それにしても――と思へば父母の姿があらはれて、行くなと言ッて呼び立てるやう、あゝ御尤、嘸、まことに！　常から御心よわい母上の事、蝶よ花よのいとし娘の姿が見えぬといふ上は――あゝ朝夕の御物をよく聞こしめしたらうか、それとも嘆きにかきくれて……

世の中は氣丈で無くては。めゝしい繰り事とは自分ながらも知る、男子ならまさか是ほどでも。男、それにしても窟子。

あゝ遠くの丘が影をやゝ呑

あれから先きは？

しかし、思ひ返せ、もしあれが――窟子ならば勞して甲斐もある――もし推察が間違ッてまた其の戀人で無かッたものならば、追ひかけた甲斐も無いこと。さア、どちらか。

と思ひ出して見ると、また打ちてはすぼ樣な考へが邪魔（いちごの言葉を假りて言へば）に出て來るやうな。窟子なら、よも、よし道德堅固な人にしろ昨夜わが目的をさへ話した程のものが、今日こちから水を向けられて終にをはりまで黙ッ

て居る譯は無ささう。或は人ちがひでは無かッたか知らん。

人ちがひかも知れぬ、が、それとすれば又尤もうたがはしい事が有る。

われで我を評すれば人もほめてくれる程の美色、それ、いちごと言へば大方名も京洛の間に聞こえわたッて居る樣子。義政さへ、解語花いくらも媚びをたてまつる中に、この自分を一向に戀望して――それぱかりか外の下郎下司に至るまで自分をば美人と一般にみとめて居る、その美人にねんごろに泊れと勸められてろれでふりきッて逃げるやうに、影だけを打ち棄てゝ付き穗も無く行くといふのは通例の男子の情にありさうも無い事。

小供の中から見覺えた宮中の淫奔な風習、ろの間わが觀察にとゞまッて、ろして世界一般の男子の情は斯うと見とめを付けたのは宮中の男子が美人をねらふ一事、大抵なものがまづ身をへりくだッて女子の歡心を結ばうとのみせる世の中に、あやしい出家袖を拂ッて淸淨を身に背負ッて行きくさッたところを見れば、どうしても凡人とは思はれぬ、どうしてもそれが男子の普通の情ぞはない。あるひはろれが窟子で無いにしろ、一念悟道の外にたづさはらず虎狼といましめられた美

色をば命をけづる刃と心から身ぶるひして逃て行ッたかも知れぬものゝ、しかしつら〳〵思へば、今この澆季の世の中、倫理のくづれたのは大內の垣よりはげしく、人情の色褪めたのは二位の紫にも負けぬ世界に誰が、よし出家にしろ、十戒で身をかためやうか。葷酒を禁ずる山門の石杭を城の兵が砦石にうばッて持ッて行けば、ろれなりで結句毒で毒を制したやうな心持ちになるのが今の出家の大抵の有りさま、悟道の目に美色を寫らせぬといふのは慰つかぬこと。

どう思ッても窟子に違ひは無ささうでした。ああ其人は兎角の內すでに影も遠くなッて……いよ〳〵こゝが決斷の境、決心しろ！

よし違ッたにしろ、違ッたらそれで思ひあきらめて歸れば宜い、眼前に肉の堆いのを見て猫がどうして手を出さずに居られやう。いざ決心！

終に跡をば追ひかけました。が、相手はすてぶる進んだこと、追ひつけるかどうか、ろれも分からぬ位でした。

第十九

京洛もかれてれ盡きたらうと思はれる處まで來て見ても男の足には追ひつけず、

いつか〳〵姿を見うしなッて仕舞ひました。咽喉は燃えるやうにかはく、呼吸は迫るほど急しくなる、で、途端に井戸さへも有りませんでした。

昨日か、一昨日あたり此邊に軍も有ッたのか、道は一面すさまじさに充ちて居ました。右へ五六丁の處にあたッてはるかに民家も有る、ろの民家には兵火が猶炎々と燃えたッて居ました。途端には死人が算を亂して屍を曝して居て、いづれも其血はまだ鮮か、その顏きの猶なま〳〵しいところ、其世の中の者も慄とするくらゐでした。

差しちがへて死んだらしい、折り重なッたのも有りました、物めづらしさに差しのぞいて見れば、上からは下の咽喉をあぐり、下からは上の首を突た樣子、上の首の横には尖先きが白くあらはれて、そして下の男の眼中には血がたぶ〳〵と浸み出した鹽梅、くッきり見開いた目ざしは宛然猶生きて居るやう、ろの凄さ、目は最期の光りに白く、鮮血をうつり合ッて口に言はれぬ哀れをみせて居ました。

もはや分捕りはすんだと見えて、幾十となく斃れて居る死骸の中すでに目ぼしい太刀や具足を持ッて居るものは無く、中には丸はだかにされたのも有りました。

それぱかりか、既に物を分捕ッたといふ記しにかならず一刀づゝあてゝ有りました、一刀づゝまるはだかにさへ。

主の無いはなれ馬が氣の抜けた顔でうろ〳〵して居るのは隨分の數でした。戰ひの濟んだ跡はなる程こんな物かといちでも始めてつく〳〵知りましたが、それにしてもあの物すごい體を見ては何か心もちもわるくなりました。

それかと思ッて見ても見わたすかぎり軍兵の影が一つも見えぬ、就いて推すれば遠く陣を收めたのとも思はれたものゝ、しかし身をかへりみれば昨夜のまゝの鎧打扮、もし、軍兵に見付けられたなら敵とうたがはれるのは必定、あゝ、わるい處へ來た。かうして、ろれ故窟子の跡を是から追ふのも亦可否、ても殘念、むなしく立ちかへらなくては爲らぬのか。

心を落ちつけて思へば、どうしても是から先きへ進むのは疑はれに行くやうだ。感心に前窟子を追はうか、家へかへろうかと思ひ煩ッた時よりも思案は早くつきました。怖ろしさが決斷の力を早めてきつぱり思ひを堅め、やゝ後へ引きかへさうとした、ろの時は最早遲蒔きとなりました。

やゝ頭をかへす途端、むかふに軍勢の影が四つ五つあらはれると思ふ間、あら、馬に一鞭、こちらを指して逐つて來ました。

蹄の音をば待ちむかへた樣に耳がさとく聞き付けて、ふりかへッて、よせば宜いのに駈け出したいちごの姿、立ちどまッて睨めば狗も吠えぬものを、この思はせぶりは敵にうたがひを增させました。

「すはや、敵でざんなれ。鎧打扮は如何さま名の有る武士ぬいた。それ、逃がすな」。

言ふ聲の文句は明かにわからぬものゝその邊の意味はこちらも推しました。小供の內からいくらか習ひおぼえた鞍味。はなれ馬に追ひついて美事飛び乘りました。

飛び乘ッたまゝまだ驅け出しもせぬ內、追手は是にせきたちました。徒步ならば及ぶかとも思ッて居たものが騎馬となッた上は……

「ろれ逃げる。射たふせ！」

無情、箙から矢を取る手も見せず、追手の四人が一同に弓を滿月に絞きかため

ました。

時刻はやゝ辰ちかい處、いさましさうな旭日が高く登ッて人馬の影をみじかく地上にうつして來ました。冬近さにいきほひは減らぬ風、砂けぶりを噴き立てゝ、後ろに馬蹄を白くちらつかせる命の競馬場、鎧の袖と草摺とは言ひ合はせたやうな同し浪を打ッて、早いことゝて馬の尾は地面と平行。

「矢頃ぢや、ものどる！」

追手の言葉もまだ終らず、日にきらめいて飛ぶ白羽の箭數、が、運のいゝことと四ッが四ッながら仕損じてむなしく道端に落ちました。

あゝ安心。

が、あら、いつか二の矢！　いちごの兜にあたッてかちイり、見る間兜は飛びました。

氣に撲たれて、思慮も最う無。前後忘却していちごはかッぱと鞍の前輪に臥す

——早追ひついた敵。

「いけどれ！」

馬を近づけて大手を廣げて立ちかゝッて見てびつくり。大わらはになッた鬢髪の匂やかさ、柳眉怨みを凝らして人を睨む目の色も半ば血走ッて居ました。

「女子のやうな……」

近ついて馬上ながら突き落とさうとした金鐵の腕ぶしもなまりました。で、勢ひをば言葉に移しました。

「落ち武者」、一呼吸のゝしり飛ばして更に言葉を改めました、「御運の末でおぢやる。御名のられよ」。

尋常に勝負をしろと迫りかゝりましたが、いちごは目を閉ぢて物も言はず、まだ追手は之を男子と思ッてのみ居る事、人品の氣高さ、いづれ然るべき、由緒ある人と想像して無下に飛びかゝりもせず。

「御名仰せなければそれ迄、繩目ではづかしめ參らせうず。いかに、御名は？」

「繩目を受けう」。觀念しました、たゞ女子と見られまいが一心で。

「繩目を？」いかにも勇氣の無さに失望した語氣でした。「御望みとあらば、繩目にかゝッて陣へ來ませ」。

第二十

陣につれられて囚人となつて、しらべられても終に名を言はず、たゞ思ふ人がありることゆゑ許してくれろと乞ひねがふばかり、それでも油斷の出來ぬこと、護衛は日一日とかたくなッて、てゝにいつか四ヶ月を送りました。

しらべられる時の應對辯舌よどまず濁らず、あつぱれ器量のある武者と見えた、それには陣の頭人大幸主水助もつく〳〵感心しました。捕はれてからこのかた爰に四ヶ月、その間いちごは鎧を着ず脱がず、湯をすゝめて決して入らず、たゞおだやかにして居ました。敵の武者を、歸順もさせずに久しく養つて置くのは虎を畜ふのと同じこと。駈け出しの若大將でもその位の道理を知るものを、生まれ落ちてからてゝに五十年、十二歳の初陣か一年宛、手創を看板に儲け溜めて今日までも一手をあづかる山名黨の主水助が思ひつかぬ譯も無い、ろれで猶いちごを固ッておくのはよく〳〵の事でした。

實に今度ばかりは別に思慮もなく男のふりをして却ッて幸ひをも得たやうでした。が、男のふりをしただけ逃げ出す際も無いことでした。

家を不心得から出て自業自得とは言ひながらやがていつ歸れることやら。そこへ思ひ至ればろゞろにうら悲しくなりました。すでに最う四ケ月、家を出た頃は葎がまだ青々として居て、今はそれも鴈のなみだに大方染められたこと、陣屋の軒にしばらくの命をむさぼッて生ひ出た草さへも既に黄色になりました。陣營の夢、たゞ聞くさへ無情なもの、まして心なくとらはれて空しく楚歌を聞く身の上に於ては。夜さへて月あきらか、氷りのやうな光りを浴びて大地一面霜にこほるばかりの夜中にも劍戟の音に夢はやすくも結べず。火も無ひ一間どころには雪氣がものを得顔に骨にめり〳〵食ひ入りました。

「山中暦日無し、寒つくれども年を知らず」。陣中でその詩の意味を今味へば、子の日の小松の日も、弱杖の日も思ひ出されるばかりでした。

弱杖の日に、去年宰相の若君がいちごばかりを追ひまはした事も有ッた、その時とわづかに一年、兒の手柏の裏表の運となりました。もとより身でまねいた事千萬悔いても歸らぬこと、また仕方の無いことながら、あゝ〳〵恐れやうとしても恐れられぬのは最初の自分の思慮の淺かッたこと、窟子にもあへず、親にもあ

へず、いつ何うなる事やら。

思へば窟子とはよく〳〵の腐れ縁、結べもせず、それでそのために我が身のわざはひが出來るばかりの惡縁、どうしてこんな恐念がわくものか。

自分の身が女といふ事を明かした方が遲がしてくれるだらうか、どうか知らんも聞けば敵の軍兵の中に「あれは名高いいちごぢや」と言ひはやす者さへ。いつの間にか有るとか、まだうれを頭人の主水助は信せぬやうな、うれだけが仕合はせなものゝやがて其内に信せぬとも言はれぬ譯。信せられたら化けの皮はあらはれる事。

さうかとて男のふりばかりして居ては何時までも際限は無い事、思ひ料るところ、男のふりをして居れば臣下にでもなッた上で無ければ身は自由になれさうも無い。臣下になるふりを爲るだけなら譯も無いが、神文に血判して誓はなくてはならず、さて神文すれば盟ひを破る譯には行かぬ。

いつそ女と明かしてあはれを乞はふか。士卒には褒められて居るものゝ、主水助とて男。あるひはまた女と聞いて仇めいた心を起さぬとも言へず、さうした上